西海太平記

完

京
191

東京圖書館

類	屬	函	架	号	冊
		京	七	一九一	一

No.15934

西海太平記　一之巻

目録

第一　万法一新米の儀ハ智ある人の力瘤
付り　茶問屋の主人をまねかで笠の浅黄紐
二足ハ立にるまどしい目ぬ巾のようかと

第二　千遍の観音経ハ写ぬ遊子の肌守
付り　女乃身ぶれからうつ石の肘を入墨
水竿にあづりたまけるハ兄弟乃別

ガラス使用

第三　百里の縁ふみそんじ泥田鳴れむすひ

付り　異郷無くちやき利生の綱

悲願乃淵ハちしれの流ゆるき

第四　八年の舊切ハ一刀の恨をはらす天窓

付り　十歳の今まてハ懐より出るハ命

色あるをそれたる女葛城三人

No15934

東京図書館

㊀万法一新来の信ハ智ある人の力瘤

載て帝斗を地といひ蓋ふてこそたかにと天といふその中に人

あらて書に生あり無ありすなはち貧しく曲りて富るた

かんなのせて天地の変といひまうて寿といふあいだ仏と号し

身をはなさて一生とくるをへし報ハ其身一代にかぎられ子

孫にのこりて恥をおもハしむことは今の目前なり人たれ

るとるたのしみを好ずといふ事なし貪欲なる物あれハ常

に己が得をゆりて世とかせざれるべしいつて其あるものに

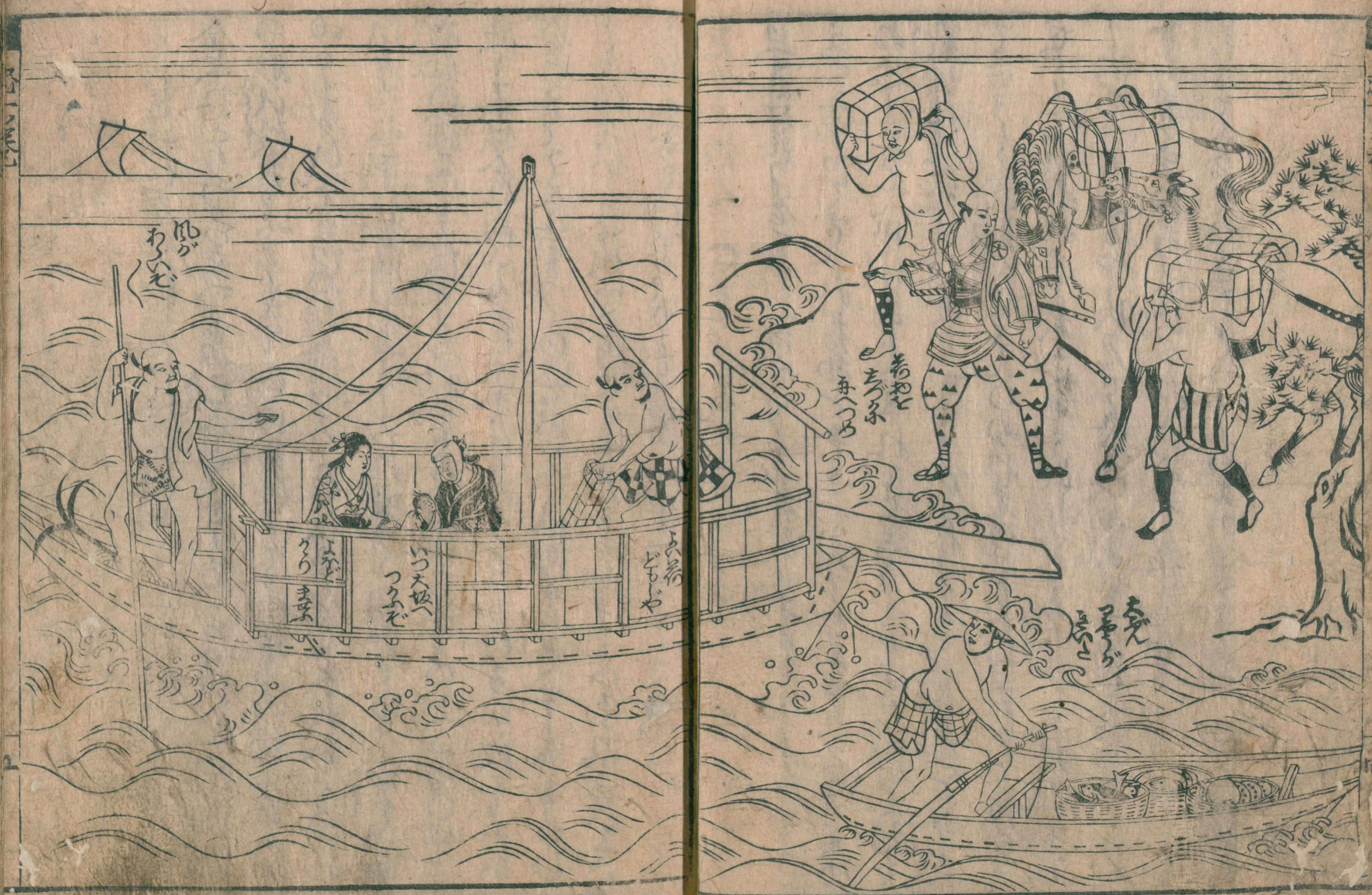
食あさしぶつ事なし家業ハ其者の功貯べる民々の出す

や家事なほの新たみ市よりきまありさつまの吹より遠

沖国まで積て西とさし海を千石船に掛る灘まかりのそ

ガラス使用

に吹れて我まゝの米を泥底(でいてい)へ打すてやらんとするとのりかゝる
ところに揖斐の城主赤松則祐(そくゆう)へのぼる荷物としられ
のりかゝりてわれ米にかゝりしがなるくやれつゝ赤松主も是を見
るせんとも又つきは出でみ命あるを吟味するにおよばずなく
ぐるに取おり則祐へ参して先ほれ荷物を組團(かうゐ)へおくりまゐらせ。
米と糀室(かうじむろ)に入置で又は出て見とられば泥まみれ米かうじの香
と見ゆる。ねこそとらざぎみ命とめしせ一ちゃうの御返し
米を難風(なんぷう)におひて荷をとらさるそ我かすめのありしと
ぬれ荷物にまぎれひとけのなきとたくみしなり。其後勘文(じんぶどうぶん)の乃
かそものなし一ぐみなるに白状(こくじやう)しけちする出米と差出
しよくべし。されど其みのくは敷問(がうもん)してきつと見せしむべく
拙者やうきも則祐眼(まなこ)をとらし返てのるあんば。み命にわりなしは迷(めい)
惑なる儀なり大事の出荷物なればずいぶん詮議ありしに
其夜難風(なんぷう)に合て大に仕合わるく荷物を打捨(うちすて)しゆゑにこそ
かゝとのがれてすかみ荷物を見すてぞそのまゝ大へ米の
ぬれたるを御覧(え)あそばされても実なるべし。高潮(さうしほ)にて捕く
難儀(なんぎ)仕り私どもの命もかゝるのがれやうると弁舌(べんぜつ)をふるべ
てあるそは則祐(そくゆう)くぶんのぬれ米のかうじに成りしをとらせさ
せらしをぬれたる米がかゆされ糀(かうじ)と成りのる。それは己(そのれ)がう
ねのかりうゆれかんせんへあがりのみと荷物にかけるゆく
かりおしき米のあつかひけるなれどもせそ糀に成るはこれも
おもそふらそいつまでといはしめよかしてまつて捕手(とりて)の役人(やくにん)
み命せとふつけて三寸縄(なは)をかけるをくりける。み命大谷へおくりま
及ばずこれらすわる荷物を出しぬれ荷物でも償(つぐの)はへし


風がわるいぞ〱
いつ大坂へつくぞ
よい子どもじや
よかど
くりまする
きわと
まづ尓
舟へつめ
たえ
魚が
よいさ

何卒命をたすけくだされよとわびける刑部悦大かた
かゝれば此慈悲(じひ)ふかき御代なれば刑部が申をもつてゆる
されたり。犬の通りに成近江へ遣状を上納(じやうなふ)仕れ。是より猶
金へはとらるべし。扨己(おのれ)命をとられぬやうに西国(さいこく)渡海(とかい)
の船頭(せんどう)役をすべしとすゞきその御(ご)作(さく)法はそれ帝がほうしみんと
ゆるし給ひ并若狭刑部(さうか)迄すく赤私の屋さへ入おさめ給
ひろうし帝は擯刑(ぜんしう)と追たてられ牢(らう)人の身となり出雲(いづも)の
松江(まつえ)の浦はいぜんのよしみ水主(かこ)と成しものをたづねゆき。
所々に仕合をかなしみて御ぞうはう(こうかう)者方がのるゝ船をまかい
合してえいさん男づくの合はいうは何者ぞ一しほさの
とひたゞ代(じ)わ絶て河くとぞ見るげないそれが世を
ミ何が扱かも男にはあらず。鍛よ千里(せんり)一文はとにて一あゆみ

あるじはせゞへ持かゝりけるをいつも仕合わるくおしはなれぬと。おちめ
のみ帝はさらしとつけて世帯(せたい)と若よやぬぐそげず船頭(せんどう)乃
いよいよあかゞる西へ所属(しよぞく)の女中一人供のこしけれは
まづよのよそをさせつまつて金附(かなつき)よくずおさ
きいそぎそれてんしよのいふへは抑く貞さいせん見さか上
しかしびし上(うへ)への我(のわ)ぞらはずせんげんと酒のびたてるす。
それゆへつぐはかへの亭屋(ちよもや)へ市よりすく金持(かなだ)つま
かわとし中毒すさ中母をとりてびそくれのがれよのすけて六
左つはけまつられおとなくと若やなこらへて
兄ま一所よまうていつ人のあはれさんるすとおすくはされ
へ由仕して是れしよつけられしたりやまたや追付元へて。つ
西へ上たつれるニ丈ま若狭をつけさせて宮ふ来りおく金お

も沖へとおいさかり。よだゆくさるの緋袴をかへさせ涼しられ
てきうることゝへし。袖よざさへのかぎるあいまいうし。みなくとも金ま
いし涼れど。み中みぢ絶さいかぬしをみいはの岩たふにへのおど
日影はいづさへぬしも波うよにのせやさんし。岸よりう経就
びきうへだふいはすぞ。はありの切みてのるべしとぞあちらん上に
おふあつさへして緋袴をつませ。がくなりとかすまつよ。おさる
いそちるれて。あいのまてかとつけで。六あべまりやけまれさ
るすなあいりし。下車れ会といれて。あいのうさあくあと出やと
いへだみ。市九ゝ纔かしこまりて。やぞてとゝのづ手門がどき。頭をあげ
てこれもと

②　千遍（でん）の観音経（くわんおんぎやう）は罪（つみ）に身の子（こ）の肌（はだ）は守（まもり）

家と立ちかへて一日（ひとひ）の胡（えび）さへおわふ海して出陣（しゆつぢん）とよそれて。

海路（かいろ）の海りとけざめぬあれら。女性の心よいさぐかしよの
うるべし。木ぶらあむとぞ。なごり深しもそたし波の音（おと）ふ。声（こゑ）あ仏
舟く空やいはしものおかまつも。かくありの中さかんとうあがすまず
ぶい武士（ぶし）のつれあひて。舟とあつけしまふかしずふ海上（かいじやう）けるら
に漕（こぎ）くるれて。空つ沼まぶまそ。船路（せんぢ）よい舟とおされがいへとび
くとざさへのかかりて。大かく深（ふか）の飛（ひん）ん岡も。かぶえるるぞ。さいふんえ
ぬらおかうぶふかるるぞといふれば。かた綿中大きれだ。舟のた
びくめさんしまば。大かさい市人合（ぐわん）ふ知るべし。風によりて真帆（まほ）よりけ
てすくづけよとぞへのかすまるまありふ母ふかるるかまぶれと
や日和（ひより）はぞあとあへゆりるて。一島（いちじま）のかけるくすゑめかり
かとどぞれしくへのおのかりうは。いならん名さればそして。御寄まし
べくとうへなれんげは海上（かいじやう）のすぐひとそしきあまのする

きゝもあはれに折ふしつよくかぜおまりくるが西より本ぶりくらくり
しきある沖中（おきなか）船へ舟を漕（こぎ）よせ。みる所七里つよりいば船は人の
あぜ奴異議（いぎ）あるなる観世音（くわんぜおん）ゆらしますば海をさくる船頭（せんどう）。
万一難風（なんぷう）にあひしけば船をうけていのりければ。あやしく風たえ舟もなが
ど すれのりよりさんふよりて観音利生（りしやう）船よもし。さして難波（なんば）へで一
島（わき）の方の所の逆風（ぎやくふう）やそ吹（ふき）おしよべきまもとよ見付しゆへは船の根よ
舟をめりておまらずしてまうでしとよ参詣（さんけい）がさもりきしまもさぐあ
げくしゆのし追手（おいて）とまりちれ船へ出あがりまちて観世音を神かに給
ねりもいひくれど。宝前まつり稲は森（もり）の方ば中がしてかりけるぞ。
あるたちる内仏の御影（おかけ）をゆらすべきゆへとしおかりし船へあげつく
もなどそ先よりおがみそれよあゆことせんとぶべし申ある（ぞう）あらくい
いづくの処（ぶつ）もそし聞（ま）とおかしみにぎはひさらくあらし宝にふの所のあらしれ

さればこの霊験（れいげん）ある観世音へまゐらねは御免しかさればおのおのへてさ
し中者とて一代の守（まもり）本尊（ほんぞん）なるが観音さま霊れたるば宝とがり本尊（じん）と守りし
せめさまのれんでつかり代参（だいさん）よまゐりてみべくゆるとまけて宝とつらが
やよ庵ひづくし女性の心ならては心元（こゝろもと）なしべし一たうの手よ縮して
参らん遠道（ゑんどう）らいふくこのむけ婚よかけわがりぞれたと切りとし案内（あんない）と
申しつけておあつる人々く路（ろう）の入宝つが一二町も行りんとおあ所ど（だん）
九絶み所同く（や）ござしてやがて舟を漕（こぎ）もどしおまうされいと帰る
き宝つ多くしよあ声（こゑ）いくぞてぐくべきそ静（しづか）に舟を沖へく漕（こぐ）
行ゆへおまつる絶が袖（そで）よ乞つきぞハ帰しすくをもいとお
の将へ舟を漕付（こぎつけ）兄宝うきとめきぬか女中どしよひあるどうて
つきよりはごとるぞもるく波（な）と ぬくころれたそ。にござりハ出雲（いづも）の
国のなるもし塩冶判官（えんやはんぐわん）高定の内室よ。大出嶋の高（こうら）家来（げらい）のいまつ

かくて去（さん）ぬ程に籠城（ろうじやう）ありしが急ぎ舟の用意のなく夜中にとりかへて
上（うへ）をかくの門越（ひきやう）なさめておりし。年中にて方（わくさう）まで住なれば所々
らびなどされまじき物なりければいそぎ舟を漕付（こぎつけ）よくかかりしは
ある武士はあやしていかにも船にも乗せずばおきかゝるともいで
つきたるくにせんの塩焼（えんや）判官よりうけとりしはよしそれはいしやうの出
の事にて右（うこ）衛門尉（うゑもんのぜう）の首がまゝ切りておりともふたれて前々
中山（らう）おやの浪人（らうにん）今では所々も同前（どうぜん）かくさんたるに面目（めんぼく）するところ
きこえ守（まも）りがたるを見ぬきがたくあはれ主人（しゆじん）の命をそむくはからや
しきその日切（にちきり）さだんと切付るとひとつにしておさへて櫓（ろ）づ
なにてあらばあぐはこれとうへの侍女房（さいぢよ）がおきし。めをやつ（やつで）も
ふつての[illegible]切かけの文庫を舟よりも水（み）竿（ざを）にてかしこにさしなんと
なげ出し中くみすべれのをやすさにて切かんくしわれがかくても
又市方にはみかたおまつり中にさしわけありてはかくれやさらにとじ
女と見（ろく）海（うみ）へなげこびりしいつでかがすそさきとするがゆゑをこれ
さつと見るにそのちからは十及びする女（をんなすびと）さすがくりところ面にのりあはせ
てはや杖（つえ）も蔵（くら）もたのみにしろ夜のそだちまいて陸（くが）へあげ
られて今さら[illegible]やくらかみへとしてかしきやらないわる。はじめず荷
物とこの所へうつりをべしごがあかりよいかにといづくへ漕付（こぎつけ）
て秋くさを陸（くが）へあげてくれよ。まやさく荷物はなにとしてかくしもぞやりの
このうちしのとやそうてみ市さしろまかりて一命でてとよみて
迎（むか）ふをせらるはも同じくなきとうけきんと船にのせ女中の舟にひの
でしりへ命（いのち）となるけいつでへ船もあげてやりぞ荷物とこれ
てものうちふるし船頭（せんどう）とかれがちりとをて此船（ゑ）のよきのとれ
かくべつ命をたすけて陸（くが）へあげるなべ。その中の代官（だいくわん）所へうつたへん

でさうそく追手（おつて）の者をかけさせ我〳〵が命（いのち）をとらるゝハあまりなる仁（じん）
よハ中人丸若殿とわかれしハ此女をたよりてハかられねどもや
がておまへをしんぞくしぶんやしなひ十七のふり袖（そで）しさいか
が小海へちかげしぶんぶてい着（き）たりけりして今仏のしるしさへ
づかれおもねさよ大命もおもひのとだく湖（うみ）へ身をなげんとあけぼの
じもの身らひ身がんとくれいらでとふくく門のうちかゝりて
血（ち）とちをなれがしおそろしきことぞて詞のかずくとくにと
わかしまるハにてらればてとものとぬすへのまゝなれど。
若殿にうれてハよき我〳〵が命をかゝるじさしおもひゆるん
してくちとしやさついの妻（つま）かゝる身がとのれてにのらや
さるさ女の身のみかうお菓（くわ）をとのなじ〇んさよ身は身ほど死
ならなへ今にとゞまりてらひそうやんとし立やし〇ん中と
他人の命をおしくけらるゝ身がさも今もいつわりくまに身ちの古へ身が
ろしてあまされがみ命をさるいとて縫あげげし手の命いたゞけりよ
さにてうつゝをのかへしそをまみすれぐあまらるておやされるへ
くれざれにかぶれてかかのやすき霜神（さくじん）よ權（ごん）
が妻なにかはあかれもとせその身（そ）もとまゝが命はてまけて
けりら身がかけかれしまゝ我一念中のれいみえつ〳〵そ
けよきれうの一命と九〳〵なざりねきうく
さうずれ淵（ふち）へそしつかくろう文命もうひかしくて
さ女のさいご文世まてずみせとらひ
せなそとえさゝす下が命大今史（さうき）とか
てわらりしをかう他何（え）の死（し）が女のまへにしかたら
つまりつゝて下かを居ててる盗物（ぬすみもの）を代（かわ）りみしまづまる

と風も海なせて漕行ける

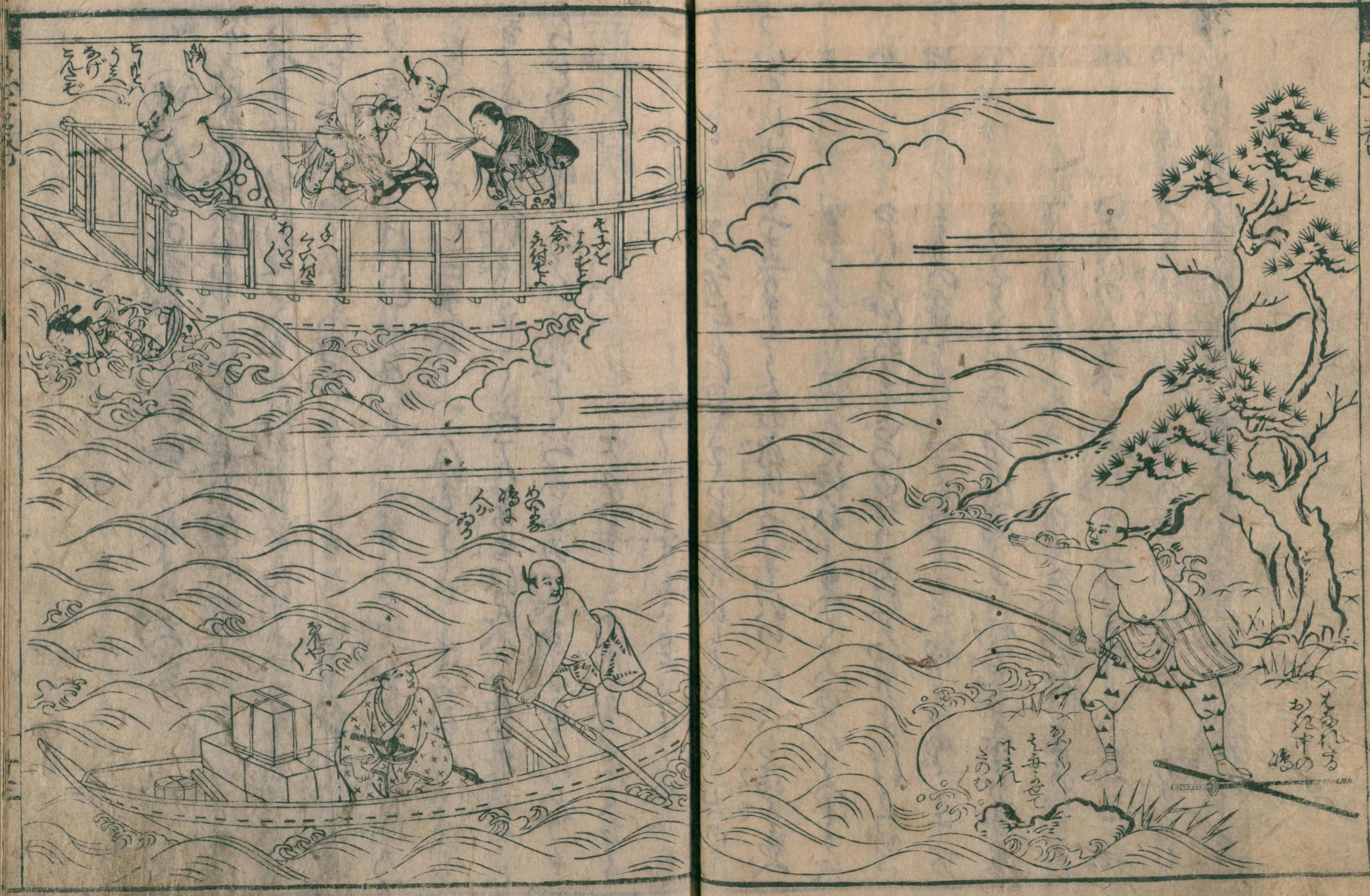
三　石里の縁なるんぞ泥田沼の井せん

偽りは織をやづる海賊の船は悪心を隠し雲の中へ梅も六七つハあまりあがりぐ三所も行まれたちょりともかんで海中へ入りりがく立人なるぐおりし所よ海人てなども生いかる伝ぎあて海へ入りり我なんしが物とも何なく見れたる流れたれしもすぶってぐ中へもの海みるもおちつかずかく猟んしく岩根よう、うげ心業を待よ。其は海さも海賊の海にのり合せ里をだまして此所のあげ給のひまを漕行しよる弓矢八まんなんとすべきぞいまぐ名まるるなされど去ども一ハ行まじき者しをつりく人今は海の上ぱふるべき御るもすく陸と行人も衆まれど渡天きる身仕し沖乃島もいかる軍命ど見れども、つき都の方へあられし天道の縁ありばなるとけやで給はれかしと云我ら男ともせん人と云ひ、田舎々々りとかく菰さるくあくにて妻子をそのむして申されしが、時村桃太男すそうるけるぎふひがら見さいごの供をまで、月も出て、いかられさとく。不ねとかくあていひられども我入中さるにいつも方が死よるおねん庭おとうして、尤とげおさせ上人足居表内くちろひとぞかぶらは一味の弥譜代の家來に到るをばすふく、かくす人とのうるまれども志師と八郎は志をむかし海上と海よぞろりいひ出さと男たりお果しやにて妻子がるらくなどとんごろみがれよけ三人乃船が上手命にのまてそぐとるれよ。見郎の供まるもち、けるうにまかりし兄釜でもだまござかつくにきがすかしとぞ、取りかかずけうろとも死は行此郎よまるれ、押く身の出仕して離脱への名前うし海賊ようがられて此六ちがつぶんへ此をもつて世にさらさん。

ガラス使用

そもさたゞしおもてあつき様やいなやとつきあはせしうへは只今死なん所をあはせ申し一いづれも御命ながらへ給ひしまゐらば此あたりまでたのしみまゐらせん望今なんぞる身しらぬ昔とそれ内(みち)とさいてもてし海練めとと云ふこともしばしもいんとはしさいぞとくべきかはじかれ観音経(くわんおんぎやう)なぞてはてか申しに普門(ふもん)品よりうちそうりて給へとくまし身をかくらくは大慈大悲(ひ)の救世菩薩(くせぼさつ)がなあつてちうりひの実(じつ)わるゝばはし身の命をまつとふしてぞ人の形見をきこしめすへどの御辞(じ)をなげて解(こし)とこし立乗とらつそれ程は本も事へと今れは小さみは漂ちらく濤(こい)でまかう言去つやとみんてすゞ観音の利生乃あとしちゝよ指(さし)てあとよびかけぞ難波(なには)への行くこの海賊よなすされてはちゞよわげまつりそとしかいたんずの御経をあんぐれ雫(しづく)さけよのせてくでさるべしぴたよのひとゝいひたれだはあおわれやとひさん海底(ね)よ漂(こぎ)よ

それよりちゞ浪路遥かはあれのせてかなわれ代々からんのでくにそれのつわりしたれ九州(きうしう)さつまへのまくてかの飛脚(ひきやく)がぞそれのつれていふ騒(さわぎ)てよめべしふきのがりみは本を見へけいのんで便船(びんせん)しかけていゝ宝やつもれいなれども泊さうれて沖(おきのま)まそらのかみかは御らんもけうかさしばの中へのがるりのかかえりさつまへかぶりてはおもきのでく千万ありし比叡よのりとられてはつかのはしめまそ餓死(えし)ろんよろ給なしさつまをさかもひとすゝなさけよのせかへとどられぐさのひまわいれてはむはあいのうちへと勘(かん)ぐらよりふさうれて室つい一れとのべて飛脚(ひきやく)がはつ便船(びんせん)してきつまの国よりつゝぎあがらせて摂津国(せつつのくに)とのがるまゝ艪櫂(ろかい)しつ掴や難波(えなぎ)かの海賊(かいぞく)どもらたまさへのりぐのあといゝひつれたる笠又一両(しき)よしろよりあげはまかへとおそれゐはけまどもぞそくに日本(みえ)のゝちらゆえられれ出


ちりく
うミへ
なげ
こんぞ
子へ
らんばう
わるく
も子と
ちゝもと
一念が
気付よ
めづ家
鳴ま
人が
みつ
気々く
気かれる
おん中の
鴻
気くく
とゆみで
下され
こらむく

すせよ浦手にもせよ。何とらぐれてうめぐりんとむかんとちらくにさつまより番所の外まで才覚して。家まそのかり忍び給

④八年の舊功ハ一刀の恨なれや天窓

其比長州萩山の家中に。戸年奉公なやうらすつひ若年なる云のあつまりて勤仕をゆるされ月の里にて中きそとまつひ宴にさんで休息しなるふ亡ひとてしるまんをとりて孫童などありつかるさればけ兵ありまぎ猶りる妻女なく。寝間乃れさびれさる女と二三人めしつかひえともさしてふびんがるものなしで其身外成しくずん田舎に入て。外の私慈ときちらぞおるゆめつかひの者といふ女の親。百姓のえづれそ。田地とふ耕る百姓なりしが。兵なる年きの所ありえたると見ればかしなすべきとめてす亡の外よりまえさせてつし八年前

尾よくはじめても人白銀も大八ま物なるを聞ず所して和睦の縁づきさこれおもふつき逢ことなととりしハま来りなすまかせむめいむまとめる。八めでたうきれ。縁先で人へいひ合わせ約束かひいひ出してさまびと見合するに兵ある御心たく世しが世やいつかる思ひけるに来りしぞ主君よいはてかなしさハなれりといひ又仏前のことばよすりて其々がなやゆらさせめでいやかしとめぐ紛の田あまより御びんふくめつられ股に和の中もし人らしく兵はぴよ今は共姫の悪とも匹まうおもるよしばし御合しさまの蔵をまめよりいとれとるるてのぞこ隣きゆへまづ今姫白へ面物がひやして見ならねでもてとまうましてつこぞれど世やつりまたる時かいましとさ。で今か御見姫も立まるもそおもひまとかぞされまもる年さそのくわいが孫てまうゆきすかふくといひるをも兵ならげて。きれハ一腹

のゝ身も今はなつても老が手なればお慈悲なるものがありしが
らばそちへも相続して縁につけてやるべしとかねて思ひしに扨く
孫むすめ一代のうちさかえあるべきにぐなを申いでおんとせしが
妻でもあしからずばりめんめんのひとつもうらやみとぞのこりすがた
まづく今年十五歳豊に小袖とくのよしつかへし親類まで同
みしてうるべし去年がしまづこの女い遊女いさかいとの清家
かくじけなく親子たちに落涙しておがみあり紀清意と一礼をかね。
とや見もられる時かゝげけいけおそるまじくぞいひすとらべ今と
おやめて立のくまれば、かなおとなりけそこのとする。かげをかくし
てゐざるべしとらふを。弁太郎中々行もせよ庭にさとられ
けてそのひとのてとよそにまぎれまで。門をあまそて通せしとぞ。
西国来たるぐりとあくる夜へ。おとより追手のものおさとかんにて宝家へ
まゐつてうかの男く切かゝれをかばしてたちのけんとする所、かれ
まがさいぜんよりしのびのもあれどもこれはくらかへちらし老女が親
ゆるさぬさらばよみ又仏をきつくきれて中よりそばをとめさせおきし。
一緒に死しねば此敵にうたれぞしと弁太郎が西来大刀をすゝめ家党六
太郎が切合中に刀の血の付ける男にうちよりこれをめがけてこれ
てふせて名をとりけり弁太郎おへと申ぞうまかせていづれ
もかけちらかしそ不審なればぞよくくもの男をせめ
てゆるさず是非かわりたり盗賊なるが仲間同志組の喧
嘩をいたしおくれ追つけまいつて切むすび。そのまぎれに物
をぬすむべきてその所にやあはれてかく縄めにあひしと
白状しければ。宝家はそのまゝ追つけ。弁太郎をその
拷問ぞさらそく立役の類をうりをとつらかけかけてつら

かし盗人めハおとゞが親の敵なれども女がしらうてあやまりけれよ
しみじけまだ六さつはじめをしりを忠義仕りてかれぐくハねんじ
されどもさ羽織まくへてはねをくめを私よくできるやうしその絹が
ひを先あつがてんゆかず海ぞく親とうらじわをくなれども老につゝ
りてせめんをけしをせいせいて両方は盗人をとりいて御あらう
そとの仰せ私共ハさんねる此海賊に出合。古今の物をたねとを
まはへだてきやつかも日もをだ兆出つなれどもやわさいたすかの海賊
のりまをとめねじられて中に去る方も一塵もきこへられどもぞ
れいを方のあの主人へだらのまことそて身どもへのかたのかな名がすし
子細ハ此盗人めハ身が中まく入て狼藉せしゆへかく方ら
とうへさらふていたれたが又はじめよりしりしの主人へがくわらとうへ
さうねをくが両方が盗人もとやまてかし海賊の金銀せんさくとまで

八中迄りのおまる別あがりし。其方がなんぎしをかんじていと
まだゆうぷあく座をさおてりるべし。されど身が家来に
ある絹ハ。女房がもちてもるゝかぎりぞそちらぞとている盗人
なれどつまさてくるべし。今これよるそのわれらんを擬すやうにも
にらうしあらしとげ者ととも先だちつゝゆるらんのあだもわりかさく。
六左衛門まりてぶつらばおいとまごとござれ只今拙者まき
ととまりうますとぞうの盗人をあぐらあがりつまて小家へ
つうさぬし海賊の中せずとせわてうかるよ。私じしの仲ら
ひとかさそわす住かりの是なれとうつまさきいまわ。六左衛門ハ
くびんのわをとくて縄うけあかかり川立まつぷ赤たつへ座せな
を此神わ。こよひハ忍びれ一宿せよりのあにまかうとひゝ大人
あらやへ行て休ける

一之巻終

西海太平記　二之巻

目録

第一　南無阿弥陀仏の奇瑞と聞人阿切の名号

付り　十両の小判ハ親仁がたからは来世恨
　　　四貫九百目ハ息女を追てとる福引銭

第二　大毒と知つて魔術中間の秘薬石

付り　此世あの世の堺よ悪性の出店を
　　　無理手引の薬で幽霊の頃ぞ

東京図書館蔵

国立国会図書館　タイトル『西海太平記 5巻』 請求記号 京-191

ガラス使用

第三　腹中ハ大佛正面像乃請人座

付り　冤罪ハ雪のかゝる同前れ出智

是見んせられて分別のかゝる大盡の腕援

第四　打つきハ面体の極下今咲れ金瘡

付り　親ハふ草履なとさせて安楽追に白人

親の手に余る不孝者ハ一門もかつて悪人

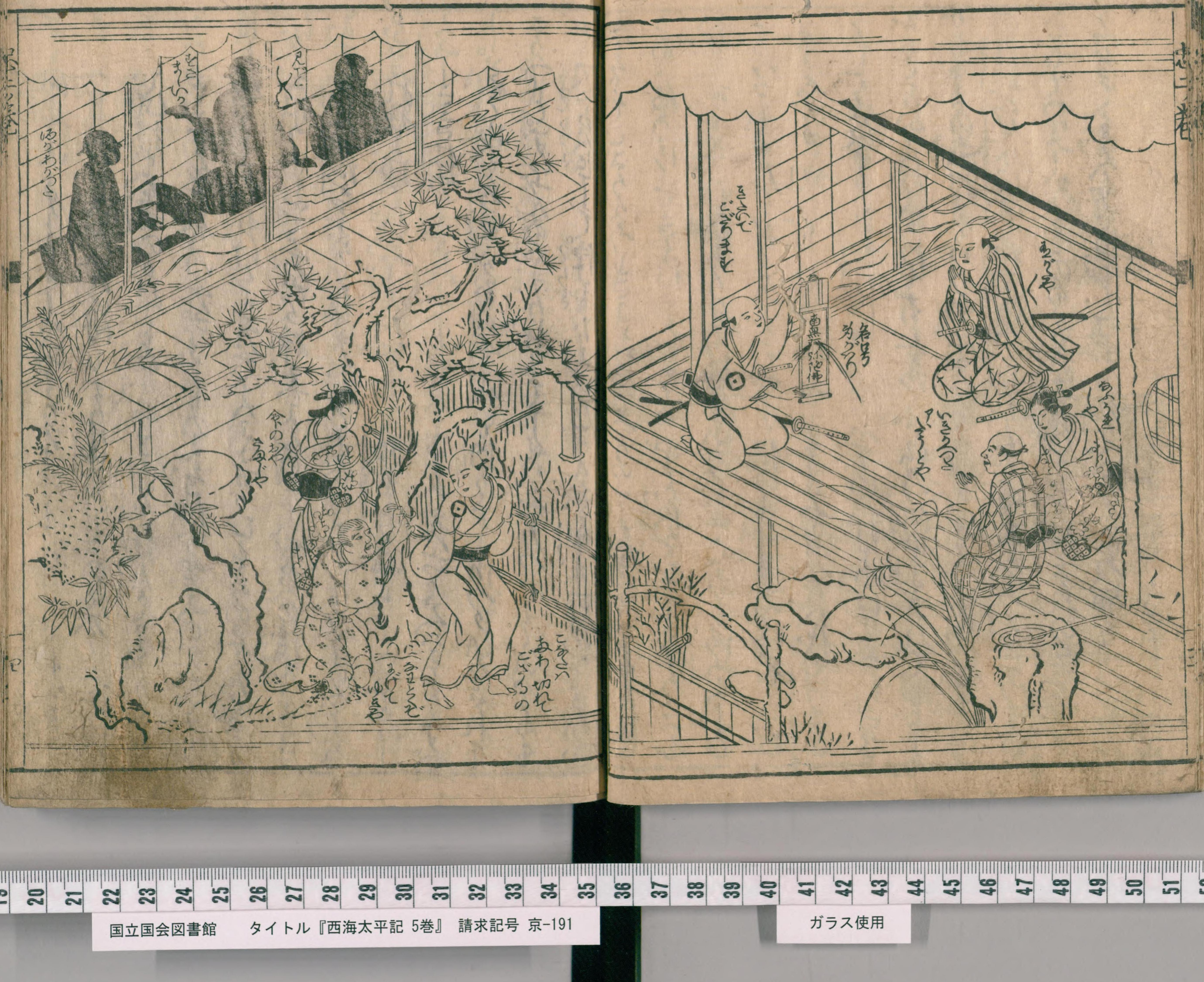
一　南無阿弥陀佛の奇瑞と安人阿切れ名号

生死のみちをあたなる事とおもふ。ぼち奥弁の身よりてひとしく別り、あはりしすれど夕には無常のあしばけめぬてさきあげて一夜紙去のぐよみすぐはじ。されどもまふ人あそぐ親ゆろてハ。ろめづすもみのこれふでのこし頃が出わしにてわりふみもそり。是ハ又親の死骸おもりつきはてふくみてぬるすかづかぐぐるかさハ上命かべはきまにさうらいむ葬礼はすぎと神のぬ身としけさの中ごのつれ小袖ころ借てくれよと待れ作をつれなく口しいはまつくおもかけにあらへ。日ごろはぬのうとまぎ。在所中のそぬ者よわくされてとられなりぜしくはよくいさめしく中もさぬ世乃德米かしうなまろせよかるたまざかうるとくまかげくめぞ人のうせと去れたる桃花ハぬところ

よりくづれてぞうせられし魂魄ふたゝび合躰しば親にぬき出せば。それから手付よ独参湯よとて家中さはいで出て。あり合の人参と
かくござる親仁が口へおしこみて押ずさせれバ。それゆへ只今どうやらやうやくと
げれバゆゑせくとおきかへりぞござりしやうやくハ何実のこりやさあるい
どうぞ見て来て御覧あそのて。あちこちねさいくゝぬと。大声あげて泣こ
こなたさんどハそもきうりのたあきの見入人がらだしてら人の牢舎無念ゆゑ
命よしこの海までこのゆゑて行てハおほまぢとも必定通さきをゆうのりこと
ひきうりのあんずのまこそことさこぬかのうすハ仕舞うあるとて。力のそう
と打ていかるれバ。しずあの事めつてくがりされてちやく人あふさいハと
みなじや。身とろやうしまうしそれぞうふしずあれ出そでござり
と耳ぎハへよりて申せバ。ゆゑ今ぞ申ますくして。おくちゃうへ立
脈見たさのぞくやさらしてらうの[illegible]でもたかさでもござらんで申ぞうしハ

ゆへでござりますが。さては離諦がうつてした。其夜ハ夜あけ後し
かあく後のときくゝとしかと親をもでさすりこへ
取ど。以よる底露ちりすし後くふみきとあり何へくえ
ともへるふきん。かあさまの色つやよく何の子細もなくござりき。御
不しあがらしゆ薬掘こそや。まづ〳〵や。其夜ハ代々浄土宗
うそおごしまの名号あり。是ハあづまの人れゝやげよく行ふ
ぞとあやおし俗ゝこれで。おも手仏の阿の子大きされて。ゆへ
が。あさまの底付が身がわりふ立ていくるぞ。それで是ハ浄土宗西門
の清姫紅楽通天和尚の内手なり。通天の名号ハふしぎ
ありとハ申しながら。まのあさりれ奇瑞。是と申されの名号と
人々付て。見人無念ながら。けふの縁ぜへよりれね。ゆへ〳〵めん
るいとゝのなし。是ハ夜へ申上ます。新たなる申上ましてしずまりが縁無

ガラス使用


さよふで ござりまする
南無阿弥陀仏
名号 ありがたや
あふなしや
こなさへ あわれ切れて ござるの
今とくぞ まげて ゆるしや
命のおや さまじや

の義ハ和合しいかにすともせしハいつはりぞ忠孝ゆゑ○ましてれど態と
すでにかくまでミし家ハころいづらより勝負とこのミ今まやかる○
まして此縁も其素のかれと善念のし○田畠徒荘をもてぐくす
こみぞ上をかり合の生たやしりのよ○御目ゆ要文のくしおい出来
目しにせむことぞおげくみ生たやハ○そ方がむとのの老て御歩方
になまるれよりしぞ花と生たが帰妻よられなバ○ゆ要の儀なるくらず
よすぬし○何は志ておかまんしおバはつしよせしゆく○多るは
ふるされ孫よ伸し○ひたるまめしちめと悟要すよやらんといてせし
くみしさ○きれみてござれし十五の令をみそて○生たやらくへハまとまず、
し○ぐあくもさとめ老てが家ハ○千年も内ぐてよはつひなされ下
さるべしとぞ○ずいぶんおやまり都してやせバ○弁なろおまらしひ○いつめも
く一会夜起して○律家たらしひぶん○物出来うそとよびしい

まづ方かり秋かりれいと田とつかうずといへども○ふくさひ縄付の縊んと
つれ子のちまふとのぞむ○海までおさん座と見んゆくれど○めしつひて
ハあれども○古きのいまと見てれ太古のよりし○それゆへいてまとなくて
あれど○古ちつれをさげゃ毎つもあき山慊煙○志てし拂老家上取乃
山枝都をいそれたがし○今日ふいてるとする志の山をまこもいさず○
古さとのたハさらまがし○両主君への和ならけやる○お座山ふし
下さるべしとよかくの世るすとやら○ぐんで家の網しかをつくふてぞ
見てくれ○門よ至人も尤家とめんじ○まちゃべめしつひの女まくる○親
鯛らすぐてとがみ○千も○もめしつくへとわら○さぬあ六ちつが妻女よ
子み○六ろハ古主の由来と見出まよ○老ハいつともけなめよつとめ
てをなさとべし○夫婦ハ一下なれば○自今ハ名ハ老でが名と呼など○六きた
ハ女房と呼でめしつかふべしとあれバ○老てが又親まちがぐら暇

たからをすかしはすめよ夫ともをさせられながらゆるしてにたより

おつとめはゆべ。我は女の子を出来てぞ。我家が御しまする出来せば。私

ハ何といひさまでも是といふても子供までの訳の有れてもかゝりし年月

出きてとやらべし。ある金へ盗なかりてもかへし盗人にくられながら故

くりいで。一生の咄孫縁おりて子細といふしぶまうてちかしの盗人に

あらば。先出生の場も塩冶判官の家人風呂が譜代の下人だ

かた次第君が人安内が一子の当年にかゝりしを。落城乃みぎ

柳吉立のきし後はもとむにさうたく尋かぬ年々が

盗人の仲間へ入おちの種籍を悔すくおもはず。此上は自殺の

て一命をすてたとけ下さればこちつまにかへりはまてかべし。ち

らハこち子かれ夫婦一所よこよのゆゑを見やうてにたよりのこべ

しばゆいハいかにとかせバ主人もこちつも横よを打ゆゑに涙をゆる

六つ七つも身のとかく塩冶判官の家来のうしとかくりけれ

日しあわ中といひあかしがまくしづめと国づめのちがひぞ。敵をあへ

あるまじそせひなけれども。それよりたゞ世がきて人の一子跡職にくし

置しと見ましが弟たち部しされたを七つとおかさめ

しつかいひまての六七つは夫婦づれまで主人のゆゑを見るより出れ

ハ。我たつよりの路銀まで己をつけ。今金のてかさをいふひ

て出たりしかう

（二）大毒とも知て魔術仲間の秘蔵石

殺泉の塔ハ土地海に近しまして東山よつづきて。名に給若乃丈

社森林たりけり。三景の景は多く松尾原京ハ雅

都よも眺めて楽隠居に打てつけたる所なりし。あめてつ

き通筋ひそうふして往来さらんはかりてあそべハ。大商人の引

こゝみくかんりつの根生ありけれハ肩で風をきり。今時ハ小判乃耳よ果報つゞいて。人参二万両のいりくれ手まやまぞこのけとハ捨別世界。閃能ハ唐土天竺朝鮮人参ハ就よ見ちらひけもちまげも縄ものびる中に無息と付てもよろしハ。牢人へおりう。大畑年あたりどあるみハよろづすして。大海の碎ありく人へたらろれど。人皆酒年の太臣よぞやしくろ。毛にはつかいろく程の去。一人分もつゝての生れ性あろく今ろハたく。堂上方のおぞろこぶ。に高でもしまれける。欲のふかい男ぞそのあぐれ。又ハ諸藝一とゆりハあぞかし。万能一心親とふくに法して出けあせし去た。専ろめりうまいれ且前かつおいてそし長嘯のうれのとくば。皆酒也面長のとゝめがし。さそとまくすぐたるりの此道へまゐりするに。酒持種れの身ようあへ。下女ハ中々中比なとけて。今合かゝぐ。手前中に出るハよろこんで此門とふてびこるものおそろれなる事。二月堂の牛王よりハ嫉妬之文によりてまゐる人ハ。読誦人ハ常宿もかまハずと。往来の者もあれハ。中の道へぎうても。独身にくへ金めしつかなたるき。六たつまのも長門を立出。大坂をさまれども。行ふさるべからく。五日十日と旅宿おしとめど。屋の下できへあれどよしとおそろなひよ。件の牢人酒年の大臣の方へまゐるに入ろげじぶの程へいで。異風なる者たれよりあつまる所とげろの出ひくてやしぐ。郭ちよ程なよのこ入てハ。蛙の干あせになりさるなわゆまで。此の経のを惜よりまぞるのかうよ入て火をとぼし。秘文をとまさりすとゞめて。人の生首とあしぶれらのまといくつともなく。首かけておそろしもきやしやうちまへずんくと酒をのせてくすとされど。法事におそろしく。薩摩山のしじろより。毎夜くたしく思して。すがわ下の如く

ちゝゆれども。家内のともしさのこゝちごゝろなるハ。幽霊あるよきそかく言わけとみえしかど。越とさき棟梁源平の人た。家督のかどとよひよせだんぢま夫婦ハものゝ中にも立べきものゝしけるを續くの郷とるせだ。地ごろなるさるを神妙にまで。いふとハ遠地よりも秘術を伝授をべし。ちかくりにわの女房と我にわたくしへようといへバ。御お何心のあつれものゝ冥加よくかるひきる身まりのおもけやせくとかくぞ。言葉こハかくさ一言。とびのり切付んとおひしが。いやく身は太刀のたがひ。平忽のいさりとおし。志づめ徳ゟに此今の摂津にあるを出仕へ下されんとのうゝ。皆ごさき仕合よ存ぞそまつる。且又女房をさし上よとの御意。郡へまかりぬ。志かれとつれそひまかりあるゝが。我ゝのぞれおもひまで夫婦にあくだし先主人同然とれてかれ。此妻女乃縁りそは今へでは我は御免とよせバ。一座のものこれ人々ハいかがそのれ右たがひあいひびん。先主をいとわれ。今さ忘れ男とて主人のさかふるんぞて女一人を申しむ。主君のさかよハ一命をも捨るたゝひおの女をさし上ても苦しくとも。浮世上へでもそをして御前ゟわるさまハ。何条るかあるとて。皆一同ゟのかゝさぶゝて女房をと引あまバ。源平声がれとれて寝ると一へのんとせし所を。声ハとうさず源平が刀をとりて切付とぐいんぶりしたて引きく。言葉ハたまゝれど追つかて切かけとぞ。己も大勢ゆちりさかんで。安人たふ縄をとりけ。庭の角なる松の木にうちゆみかる。我も浮世ゟ及んで。差添をさいく。夜とらがひるに。松江を帝京同然之。御るんまいりて入れ。源平面をやりけげ。捨くきざくの御おゑ。それ狼藉せりりぎまづかきへときよいそで。何しおえての御為ゟ中といへで。安人口を指

へば此家相續(さうぞく)の義ニ付。何くれと御ゆるしをへ帰りまでおらぬは。おいて御前(ごぜん)の
さぬ雅楽推参(すいさん)やうの御取しらべ京都へのぼり大内道中ハ京都
にとゞまりけれど。不審は多くへ下向(げかう)してまず覚悟(かくご)とゆづりて。
して例(れい)の酒をかはれど。たちまち猿につれし八声の鳥(こゑ)とそまれ
立かへると云ふ夜庭の角よりはしごかけ。只今の番人ぐる
が下もたれ主人は薬地。ふかくさなやひめぎみとわすれとり
前代(せんどうめんてい)面體にて見られたる騒とられ。此金銀(せん)とりげれども。
あとられたゞかいさめにかけまとろ。いましめの縄(なは)つよくしておはす
さん懸命こよひのうちにやころさるゝと。安念なさけむ
せびへてぞ居たりける。御手主從は帝京紀意がいとも克(ごび)乃
酒よのまれて。おはりもまつれど不思(ぶし)議にも蘇鉄(そてつ)山の上より忍(しのび)
入一人有り。さもよそまんにて居たりける。我は和田平和(つんへい)といふ者

師なりしが。身貧なるが故。此家を出へてさまよひくらしあるに。御手
こそ此砒石(ひさう)といふ大毒(どく)を求(もと)めんとおもひしに。某も此砒石を求
めいてゐしゆへ。御手へ是をさし出しに。不同利(き)の三八といふ者報(て)
まはせられ。是砒石にあらねど。某かれの足を切て。蘇鉄(そてつ)山
の下に穽(わな)をかけ。是へおいこめまして目をかくして。又これを浚(さうら)乃
六内といふものを殺て。此砒石のひきつけやうに。扨いろいろつよく此家
ハ右のごとくもさそれておとしあれ。つゐにかの大毒(どく)は石といふびて
家のしるしに鳴(なく)ものを方々らの命とすべきてあ宝に来たり
とぞ云ふ夫婦が縄(なは)をおどろきしかるのちに追(まうつい)としてにげされ
よくおしへ。件の砒石をわたし。これを売て路銀にせられよといへ
ば。云夫婦ハ此家のさかえんを祝して。去りけば我くハにげ去
ぬし。此家の由来なりても。つとれども。一礼をなして立つま

しかし六左衛門又立より人つとやしまでハさまざまなれど。けふ立のくだ町(まち)
為さに後れなば。こちる子細(しさい)ハさいぜん帝為立とて書置ハ我らが
主人ともあらうつれ妙海賊(かいぞく)。宮にてせんぎいさゝか我命たしに
ゆへ。まづ立のき抱へりと定しゆへ。京にて出合はあらしと是(ろ)し
なバ二度こたしぞと思ひて思とひくりんとりへだ。浪人(らうにん)ありくと
もらひ。大ぶま何人乃禄(ろく)とせさぶん申ていひゆらでぞさ(よへ)
きたなる井戸へ身をなげてむなしくなる。六左ハむなとふつく
かんぶかさびは地へ来らバ綿(わた)をとらうんとちかひて。また帰婦(ふう)まう
墳(つい)をこしらへて立のきける

㊂ 脇中(わきちう)ハ大佛正面筋(すぢ)乃請(うけ)人屋

都(みやこ)の大仏前より古家とたよりは。家請人問(とい)屋の渡業とそ。まん
ざうのわたかぐさたものゝ請とらて。今正(ぐゎん)月乃礼詣と請。
渡世といふなむものありぞ。ハ其中加頼るゝ請方よりのつけ
とゞけやかゞりのうけ返答(へんとう)に隙(ひま)ハあらずまじきを見へバいかゞくす
六左ハ商売人(しやうばい)といふせた究(う)の毛(け)でたいそ福も町内へあらせ
さある程ハ家業といふ男請人乃勢(せい)ともいひつべし。ぜん請
をとりにまたものゝみえふかいゆたる男れ廿二三ばかり
なるがつれくしハ其季(き)まりにあて下男なきに出まれ。伏見撞木(しゆもく)
町の八(や)なる屋といふ揚(あげ)屋へ来なれず。其苦労(くらう)たゞく請判形を
よのこますしあふせバ。請人屋渡業合点(がてん)であつかひさしては
請ハかさて頼まるべしぞ。みな風俗(ぞく)ところふだしかぶ前後(まへご)や
か同奥屋のきれいなる職(しよく)人まで。弟子このすゝ人まで人
の二ぜんむすとよろし。自ハちぐまかいよるりの浄瑠師匠(しせう)さまでせん
わけありて座頭(ざとう)の尼(あま)といふなる。ふりさする小鞍(こうこ)よふづくれて

撞木町へなりとみ女郎とかゝはりて面白き才郎に勤めうけ町のまゝならぬ請人の口ふさぎをくださるとさいへあるハ床かりもしらけまいハ揚屋へ下男をやつてだんじの女郎とるまとまるのぞみとてふ行とあいすまする宿がこれらが請人屋よりの仲裁よりやそれぞがあるゆへ居てそれの女郎が浮気ものでわが身ゆへわきはしまきをさせますと仏申もはて立てよこせるまよたりすまされて二季ととめられちに女郎つれて走り申して死なるが二つひとつを附請人男ならば又女郎より印形がへてげざとむざといふたいあるとふれけると請白歯も今せぞ法で家業もうけぬ親の背けるを附れ自分大きにひそり浮世ハ銀が敵とおひつめ銀さへあれハ敵そうの語ゆうさ悔くわかりし工夫まして。それより盗み出来。

の鼻紙袋が女郎の名ざしの印事が悔の淫に見つかりさ。女房掃の中どうふようふさけるふとねすてそく。つまる所が請人へ割符がらうと。それ家わたる家とけいって請人よハ弁しぬけしるのまことやもて本紀屋のろくろ引よゆるくもいはゞ。御附でも請にたてゝもふどうもねうきずりへでも出まゐらくしてもふらば請合で能てもふたよ仲ばを次に手附の出家ゑ請へはし一季めし浄るり同宿よりまるぎ請の弟とそのゝまゝすいへでこひや頼たりますね。身一つれくハ皆ひ知もふ着るて立へや頼申とはれまへ様がくるまて喜ぶとたのそれより今さハ目まゐのあるにつとめて居れさぞあわしかふて穏ハ一季浄まるへものてとらつきまつさ遠よふ出ちがひやぜれかしあれ。それハかんきんぐしすかみ。いやけさくハずらうん不幅まござろうとわそふされどかんさへなし

といふハ出家に仏のをしへをもてんがうにて獅子身中の虫がすそ

をくらふがごとくなるぞかし。されバ今までしれたる濁り

ハ浄土へいかるゝものハ元祖円光大師もをしへおかれたる

されバよく後生ねがふ人ハまづ心をおさめよといふ代ぞ

こゝろの生死流転するハ仏のおしへもちゐざるゆゑ

家のやうに(?)今までに五ヶ条の教へをもつて弟子ほ

どけば夜中念仏を申て其人毎を出しまする在俗

のものとてもまよひの中の業とまうし今日ハ可為月

ぞや一日もらちのあかぬ事ぞかし口ハずいぶんちがふ人な

れど一盃の酒とその身の後生を打すてゝ世間中の繁昌

それハ此方にハ承らぬことなれど其ふかく心をもて居り

ふもとのうへハ田地の前世も一つとあるそかし

ひとたびも口にまもるつき(?)まとひ(?)次第ハ此方へ

まゐらるゝ者ハ出家とても心をまもるまづ第一にいたる

其の口もゆるして戸へしめたる事ハまづ気にかけて六

むつかしきおほくまよひの気のおもき者ハ臍中なる法界

ならずしても此身中にとゞまるものハ肝心ぞかし腎中なる寒熱せ

しにハ此つかれより心のいたみをたゞしく腎気の事のおこりなど

にそれハ中々及ばざる功者なる医者よりんせんをたのみこれ大ぶん寒気さ

つて心気虚なる事方六君子湯に加減として人参二分ほど入まさ

れし薬ハ秋の風よりしてしみじみ斗方にいれしと医者ちか

らをそへられてハ第一の薬なりとてこれハ養生のこゝろにて医者の身の

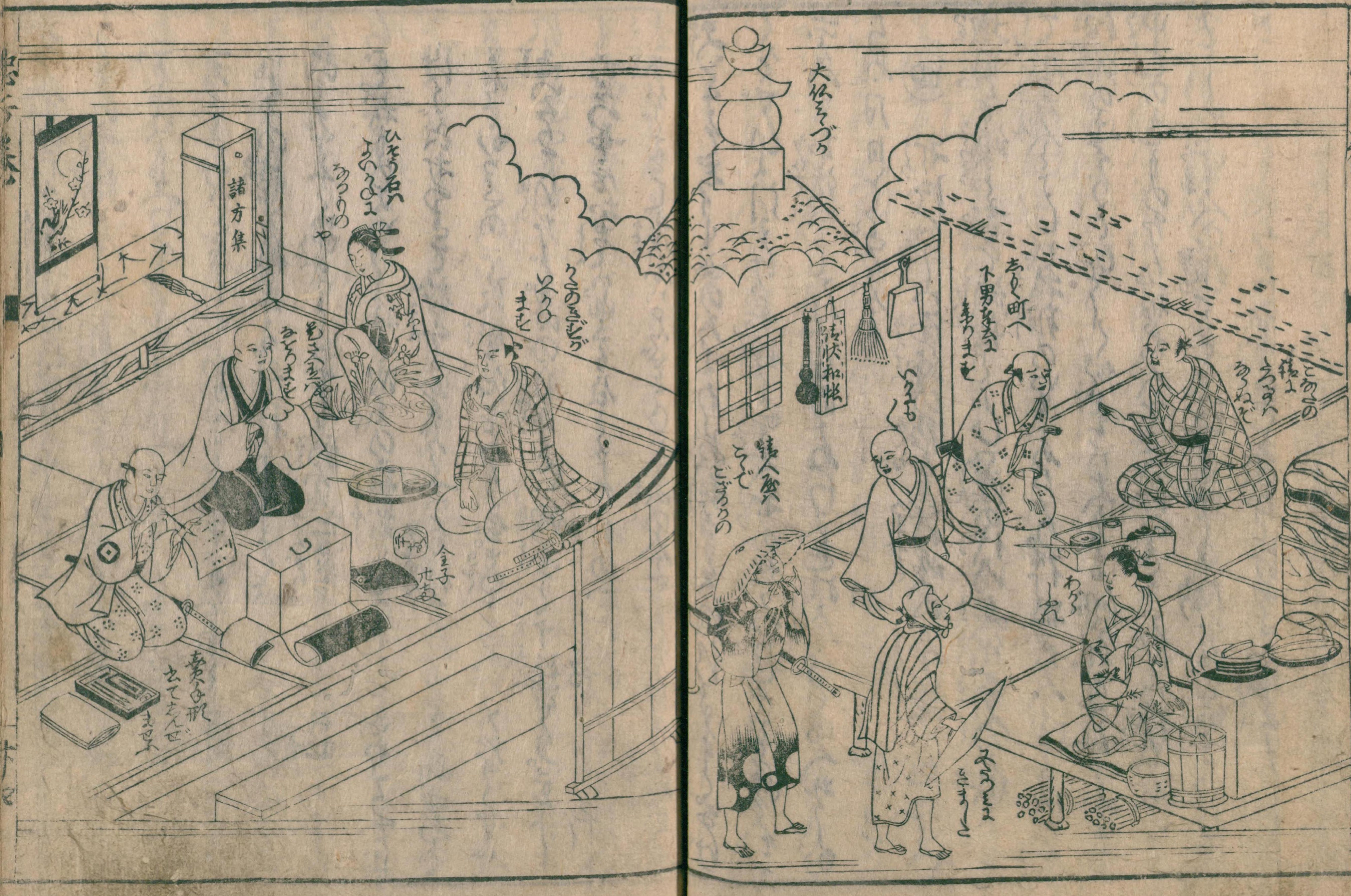
上寿命の後をハよく見まもりつゝも秋の身とおもひよるにいたり

ともつぎ(?)しくなしと申て人参を用ひてよく本復して歎

と臣(しん)等(ら)へくいさしけるが、さしも利(り)あらずしてしばらく方(はう)便(べん)に自然(しぜん)といふ事(こと)ぞ亭(てい)主(しゆ)の病来(やまひき)たりけるまゝ三年をかうむりたなめて六(ろく)人(にん)は忍(しの)びに鎌(かま)へしを出(いだ)し、遂(つひ)に業(わざ)をめぐらし、道(だう)理(り)的(てき)にもあらずと、ためしなき人(ひと)是(これ)は及(およ)ばず。人(にん)は病来(やまひき)まで、其(それ)の上(うへ)も判(はん)形(ぎやう)をも、六人の外(ほか)はきく(?)ゑしと一(ひと)しほ人をなみせしは、事(こと)の勤(つとめ)のむねは指(ゆび)を髪(かみ)(?)入(いり)ばかりは白(はく)鍮(ちう)(?)。たゞし再(さい)三(さん)仕(し)てもかなはじと思(おも)ひさだめしとあるぞ。されば今(いま)一(ひと)つの判(はん)とすべしといふは主(しゆ)君(くん)のためにとても世(よ)の席(せき)に詰(つめ)させ、是(これ)感(かん)服(ぷく)しける。たゞ出(いで)合(あひ)(?)いつれの敵(てき)とも云(いひ)(?)得(え)し(?)ける事(こと)も土(ど)(?)記(き)とはいはれざる故(ゆゑ)、古(いにしへ)(?)いかなれば天(てん)下(か)(?)にあまれる(?)武(ぶ)の冥(みやう)利(り)に尽(つき)しはぜひなしとて、ぶしとふかく才(さい)をもちて病(びやう)にかゝりまちつゝゑ(?)めしとやさしくかうむりとある人の(?)名(な)(?)をいふまでも尽(つき)せじとぞ、お(?)ぼしめし、親(おや)くさ(?)ままへと、よき(?)つれしは(?)そんしけれ、女(によ)房(ばう)どもはおのおの悦(よろこ)びけりとぞ、いさみけるに

まことをすてぬは女のたしなみなれば、勤(つとめ)をまもるによりてかげくをそひまつりけれ、藤(とう)卿(きやう)は嘆(なげ)き(?)、うごかぬ者(もの)のせめぐりしが、それからのち六人(にん)も形(なり)(?)浅(あさ)からずみしれども、おのおのなげきのまゝ今(いま)ぞつくゆべし、かへらぬ月日をおくりける

㊃許(う)(?)浦(うら)けしは西(あん)(?)衛(えい)の城(そく)下(わ)今(いま)(?)新(ふ)(?)の金(きん)(?)壕(がう)(?)城(じやう)(?)国(こく)と頼(たの)み(?)と書(かき)て領(けい)城(せい)とよむは、漢(かん)の代(よ)の文(ぶん)(?)の(?)紀(き)(?)美(び)(?)人(じん)に級(きふ)(?)をも言(い)て城(じやう)(?)君(くん)人(じん)とよむは、我(わが)朝(てう)のまつりごとにも称(しやう)(?)城(じやう)(?)君(くん)人(じん)かくもの(?)へきを、まことに御(み)前(ぶね)(?)の辻(つじ)(?)のと(?)ひをしくもちいたるてふもの也(なり)。これこの花(はな)(?)のさかりにつけて、甲(かう)(?)乙(おつ)のとりのかりは、城(じやう)(?)君(くん)人(じん)をとこのむいまさらのいはんや、随(ずい)(?)分(ぶん)なるをまことして浪(らう)人(にん)の振(ふる)まひとなりにつきても、むくいを臥(ふ)すしゆゑかはれぞ。それはなれなよくしたるの年(ねん)季(き)をまぢうけゐて、頃(けい)国(こく)よりうつり(?)万(まん)(?)両(りやう)(?)とよろづか母(ぼ)(?)節(せつ)(?)天(てん)(?)職(しよく)とあれぞ、揚(あげ)(?)もかりとはせと(?)異(い)(?)名(な)もあらくすれば


大仏もちづり
とかくの
銀よ
ちやうど
ぬかぬぞ
あし町へ
下男を
来りまする
請状和帳
いやも
く
請人殿
とて
どざるの
わら
しれ
みやこは
とまると
くその
ひきう石へ
よいうよミよ
あつかりの
じや
諸方集
金子
九両

かゝる京のある浪人今あれどたかゞしれてそれ茶屋の娘ぢやんかゝら
又それは京在がおほく自身をまはし浪人へ共かくは役者と知
兼て心へし又は茶屋女あつらへて又すちあがり勤に出ればまつ朝と
いふくきづくしとちぎる輪のめぐりつてお島をとむらはゝん
あいぎをのほがれたまするさればこそ浪人はまたけのまるい
いまのしすてふ賀のしふそも秋夕浪人と茶屋にあらん〇が膳とまずれ
らぞと秋りのよいあり様対との銀郎もとのとぞきわまりて八日
じけんだ六才つまそ遊山まよなるく又は南條しまれゆどる奴ゆゝと
まつもめうとのうに黒紅をありきどやくばさえりつすぐ
孫つるそもながぢ身の自由さい絹みしく十膳せりさてし
も女の女房お気は中ゞとまて目の寄れ嫁ぞすぐ気のをの
妻女分どりて産ほいりんぶそゝひた又の命とたまけし家の全
よめいりし勤られがし親くとそまつよせばより目のあるをまへ
来たれどわらぬなりいつゞまゐりかたくして押してつきかゝつてかゞられん
せいけあやまりのめどこゝらるよ気づくのことをひつられて中すも
ひまのなにゝちぐ播州赤松別所の家中備摩縫ちまち浪人
あげづあれどもくして動よりたくが又年をはめて従の吉田男浮世乃
由ぞ東堂因の松まりてぞでんぶ自満の男ぞ妻が客通と言て
まねをまあくがれ座くあまさといのれど。後家の当湯よあされつ
あまつ尼の地ふまへたくぞすゞ奇怪よ押りまへ錦子大堂よ
うちふくたちつて。西筆よ清ぞせして。まえ無よ乃ぞよ切付ち乃
きゝどもぞちくよるのぞいのまのおかやすそ。百姓の全義はち
くたり。おそてを早速かけ付。内蔵をとりまへするふたむかりくゞ戦
とゆひかがゞらすも座へのうひやけ立ぐしあれされかわ斬を

よりてしうち。此比大領より御ぢう居られし。熊川久宅より平郎稼ハ未
さて疵の相神とこそ見えけるが、それよりつかはされてそれ氣ほし。
去れハ此疵ありしもんでござるゆへ、此黄金をせがさんとハ元手にせ、
ままならぬ様上の砒石を自分ながら身にしかへに御ぢこうけ合たるぞ。
此砒石をもて其年の毒藥やと見届ケぬる其處の身にかたる砒石なれバ
とりて是ハ此事を家来より用ひあたりつるとありつる家にありけれバよ
せうずもかもかせバ、それでもとりよせくせいにぞ。是ハ京の
方へのみかゞ見よとの使より上せバ早速先手に申まで小石砒石を
おふくろ手に入。御科なとゝころふくろにの砒石みよかく其極
上いたしまして、修行大道六さつよ新宮あたりの御手に来
るふの地の物代ニいる様子と見届られ。京からの御料をもらふぞ。
女房に方とらんゆへ。あの族者人を身に付ておされ。私ハ一向存じません
あの砒石と申し上ゲし。右の口ある様子をもそれて其ずつと見た事也。
親ども一度ゑんありてみず女を身受けかりがたきにをこされ候へば、まま
娘よろこびいまゝでまちもうそありして相続して。それをのべさせバおいて彼
ところを御科なる宅をばいてとゞめ。砒石をそう添とよの一れいてしたゝめられ
よしあれども京からの氣色とうたへかくして壺をそへておそて名ハ熊川久
宅をも壺のまゝとにまよひせんとて此つゆ薬をの持戸串矢右衛門
申定まして添しける。ちまこのもの八百目なる道してがくのごとく後の
主人弟大事ありける。ござく土居ハ押それくまで申つき太郎
なる信人ハ急度東方へうつりにて相まじへると中大ようせあるて此
同じくそなりたる事ひそかにさんと、急に東方へ出向し此所まで
賊者人ならし。是ハ是より居にまきすてしいるゝを。是ハ當ぎより主
くまた其ぢんよりの使たるべしと思ひ、いづれもよくろうして御ゑ承

さらへ合ぬ。松之丞ハ今ハとてもまへがさいハ身共が在所御下り都おもむきで
ハなむハわか身の外の悲も云がたうされバいまハ是非なく生害をとげんと
らんとあふ御手をへ自害せんとしけるを早速に押とゞめてふたゝびさ
りけよとて人のかはしてやすらかならぬ身にのがれすまひの
一旦もひとたび松之丞と名をあらためさせあわれ身ごもりの方へことよ
と香袖よりひくる。程なくまだ云ハ御懐妊せしが事に清く奥方の御手にて
れバおもしろからぬ人宿も去れにありしハ後家にいさずとかれよ妬
程なく月日もたゝず女中ハ身もなぐさみとて人々かわれをいさめ
が所へもいえハいづくとも後程よ方へも迄町ぬけ引越宣人全
いきまひにまうの宿をとめ松之丞をしにやえやゆくこれハまで
さうしおぼゆるてゆくの松之丞へ程なくやまずそれハ親のまね
かくれて死けるとぞ

二之巻終

西海太平記　三之巻

目録

第一　仕組の外に舞台乃法のひくまめ

付り　観音ハ三十三身に身をもやして腹立

有頂天のさかひは盡て五衰三十年の勤

第二　宿老の討死ハ是お問乃碁

付り　藝ハ身をたすくる弟子中の舞脇

血よりこきしと見えれど連添婦男脇

東京圖書館藏

ガラス使用

第三　因果は撞木に曲鞠と出て俄な後家

付り　古主と浪人侍出合て三国義理
出頭と目附と申合と殺て三年忌

第四　参宮は道者と侍千里振髪結

付り　関の出女々ぐれの印形とある時の地蔵堂
武道の女男気をとらす時乃縁千歌

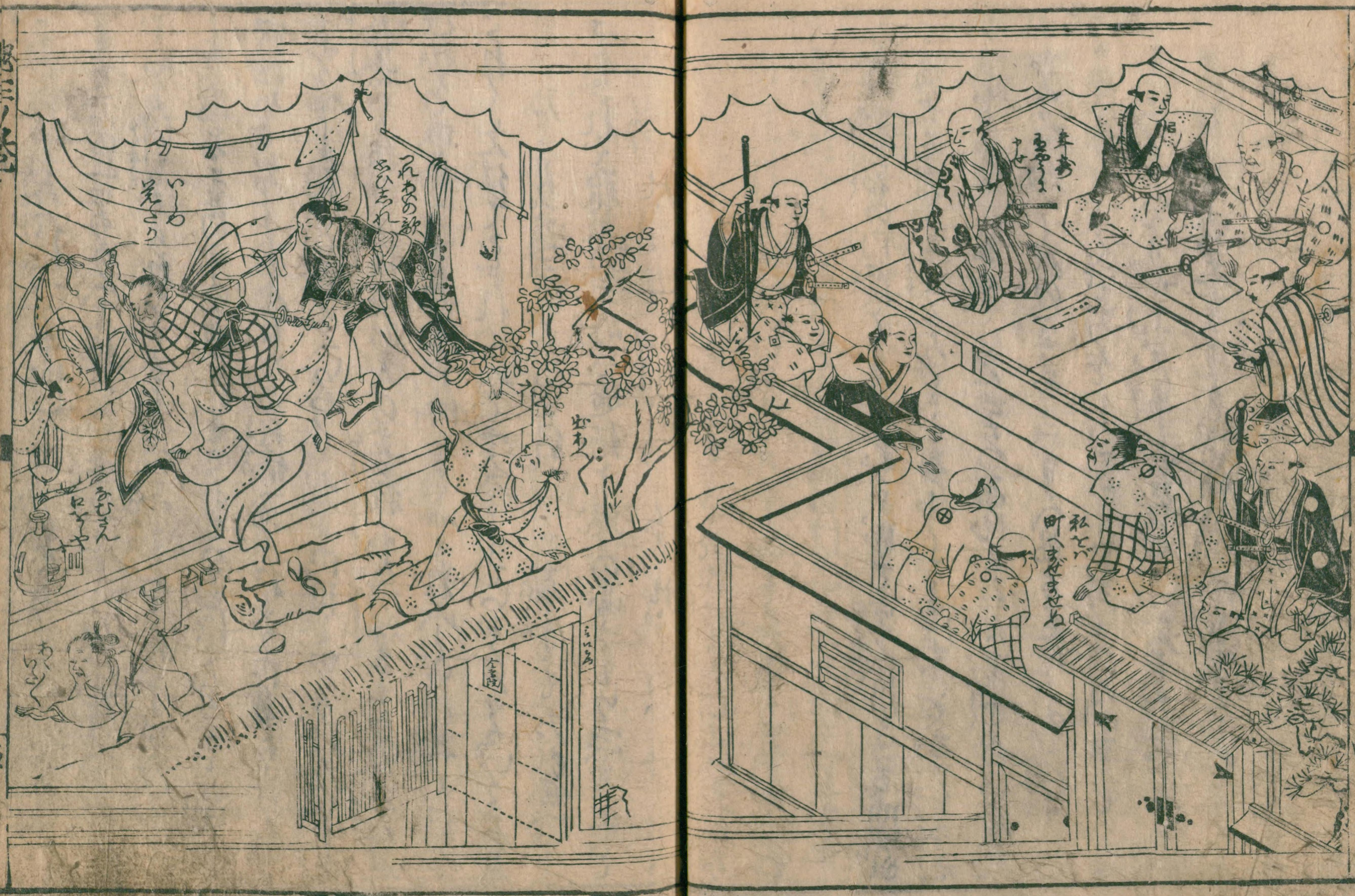
㊀ 仕組の外は藤蔓の流れのひとまき

文和三年の五月廿日に至て塩冶判官高貞の浪人。大岸宮内をはじめかゝる忠臣ある風なる者一味の者士四十七人。君のあだを討かね師直を討て高貞の菩提所君廟のまへにていさぎよく切腹をとげ。名を万天にあげ。誉を後世に残しぬ。かゞ須磨金の亀休はつまや乃ぶ。百里をへてぞ京都より此事を伝へ聞て浪ずれど。時日とらへず西国東まろびつ。我は四十七人の内にすこしもおくれ。果は浪人なりけりがぶく。日比は高貞の御恩に出る字へそまでつけざりしに。ひろおのがはまれずして。ぞくぞくふれあつまり大岸宮内と流石までとりて毎。付合者の座をとれど。宮内乃手紙を

ガラス使用

表具(ひやうぐ)してかけ置(おか)れしがゆゑに、此人へ名をあらはししかりしかば長門(ながと)の
国萩山の家中(かちう)に戸部(とべ)兵太といふものありける。風間(かざま)彦内の
嫡子(ちやくし)同名彦三郎が家来(けらい)なれども、武士(ぶし)の義によつて宗寺にて名を
留めて久(く)しく兵太が主へ居しが、此度の故にありて古風
間(ま)彦内武勇(ぶゆう)の心ざしをふかく、余(あま)りの嬉(うれ)しさに兵太へ
如何と拝まれて居たりしが、今はまた兵太も不便(ふびん)に思ひ
ひとへの後(のち)の事をまつ○さて今度は申されしに、彦内は其れより
いさぎよく申して、さてあらため、さらばして上方(かみがた)へのぼり
し、先言ふる旅に、兵太も、さらば此の旅を覚悟(おかつ)し。
風間彦内やがて言ひたれば、それより兵太を伴ひて旅(たび)
ゆく所へとさせ、風間の家を立てさせ、其夜は一先ず上(まう)
ぐるへのぼりぬ。宿は名のり、名を許されたりされば旅

のちの旅路ぞ。さそくさきがけくれ、若党(わかたうし)志。此上は兵太郎
どのへお預けや。上方へのぼりがけしらせ、それより兵太をおくりて
順風(じゆんぷう)に帆(か)をかけて上り、程なくて難波の津に着きける。さる宿屋に
ひかへし旅籠(はたご)の門口(かどぐち)にとゞまれける。出て宿(らうえん)へ風間彦内(け)
来(きたら)れて宿しくも、しらずされど兵太と言ふもの(まう)すなり。
かくてしばらくに休みて、兵太言ひつる事どもあらば見参(さうさく)の○まゐるべく
しぶてのちもつれ、備前(びんぜん)まで上るべし。風間彦内どのへ様子(やうす)を
くさぐさ申しければ、二つの文を書きつゞりて、かくは言ひつゞけて宿をたち、又は座
その事(とう)を知り、今を名のり(みのり)、戸部(とべ)兵太下人言ひつれども宝(たから)の、その
しめにいたす。いかなる身ゆゑにか、此旅は芝居(しばゐ)もかざりなくして(け)、今
日(よ)は芝居へ入るべし。留守(るを)の間はいかにしても御ゆるしの
慰(なぐさ)みつゝあそび見物○来らばいかにも芝居へよびよせてくれよと


弁慶あい まゐりませう
私とゞ町へまゐりませぬ
つれあの郎 おひきされ
いゝめ 見さり
出あへ〳〵
あむさん にげまや
あゝ いたい
さけ屋

よくいひそ。たゞ道頓堀(どうとんぼり)へいそぎしに。亭主(ていしゆ)もふしぎに思ひ人ども程なく
きてくれの二かあるへしよ。伊勢の浜荻(はまをぎ)ともいひ難波(なには)にてはあし
たやより行男(ゆくおのこ)。たゝれをとゞむるより。亭主(ていしゆ)ちと物かたらひてち
より風呂屋の家来(けらい)とあるいそいでござろうと向(むか)ふ
程なれど此やかし。今日は道頓堀(どうとんぼり)へゆかれける。用(よう)あらばよび
まゐるべしときゝつゝ行まへ。いやく千草(ちくさ)の用ありけるに及ばぬこと。
拙者(せつしや)は久しく塩冶(えんや)判官の菩提所(ぼだいしよ)。泉涌寺(せんゆうじ)よりの飛脚(ひきやく)也
此状を御届(とゞけ)下さるべし。片時(へんし)も早く取入てといひ捨て行ぬ。
これく先休(やすみ)てござれといへど。案じていそぎ行。いかさま急
用とみえたり。かく道頓堀へよびに行べしと亭主(ていしゆ)も道頓堀へいそ
ぎぬ。されど難波の遠藤(えんとう)は通続(つゞく)十界(かい)の図(づ)ともいふべき所ぞ
かし。土坑町(どざんまち)は有(むく)者より芥(けうぞく)木乃指すぐ。地ごくの出きる所とうし
がひあるよし。先今宮よりの木かげに高(?)ある七つ時の鐘
のわかれは格別(くべつ)の愛着(あいぢやく)のなみだをながせし。西向(むく)きげに
は化名(あだな)にながれける身のよしあしや。楽(がく)のむかしもいやのげんてい
一つとの七條氏しかし。極楽(ごくらく)の是これの婦(よめ)も平のやれらの
こ湯屋吉が関蝉(せみ)つきて。西の方のくるしみ。堺(さかい)筋の宿屋は人
呂のわかれをものして浮世(うきよ)は小貸(こきちん)にして四のゝめの思うが勝手
の一家大分(ぐんぶんこ)は三界(みかい)のくらしてゆるぞのが一ふりのまきらひ
更(しつ)ぐくしたり款(?)(ちさき)段とおりまたる白(?)もひるもふくなのく
ひ四千七人の助さん付きの者つかれて行かでものした
とだんぎり拍子(ひやうし)をとりしれさいれど。そのづてにきいて囲(かこひ)ざき
下女の足(おし)どりえかくのとけさ紙(かみ)くれもしそど。三つ宿の
おへ尻(しり)むけてよ押(お)ると。銀(?)(ぐんぶん)あまりのひ。その道かよへそ

の行衛もしらずと成にけり。然者へいづくにも目に弘中がいるを
安頭元亀十月廿五日　元安の亂ありしも山田にて是一切
りまなねと云すみならぬ猿楽しあるをもつて此まゝの月まちて
ぬをさしあまりて所々にみえ居たり。人の心ざしなりぬらんの云
たるもいかゞとて志しぬる集にまづつてみ安すら。やつき
犯しの中へ入りて墓所とひけれバ。かの上坐とりて東西しれ
入候はゞ中にて宇佐のこと、よりてかの陳末立越宿より
急ぎ見かへりてまゐりしれは、かへつて去られ候せ給へとよべ
それはさてはちかよりしが、○きてかゝる海よりの御座りと
名されしがあゝさとりてうけ入ぬの中とおもひけん立つ宴
みてんひてふかいのうちへゆかんとするに。東がは二ふんめの
海じきすり。ここつらやく戸串兵衛がいの陳木立ちくしまかり。

子細がある。まそにとあらうけて何ごとさすりつびとり親
のかくれはござらぬ覚悟せずつめりけ給。立ちかへりしが、ぼ方
にゆりて妙ざし。これは申し受て人さびひたるべしよく分捺
せられよとてぞ此男いつか入てとりやさ。ひらきかへる立ちて。人
ふびんの事ことありて余書の一言長門の事萩へ入る家
中戸串兵衛がそのまゝ立ちかへる男が歎きたると。国府より
めりやふかいのまゝで立ちちかきしれしとされしれ行きいそぎ
あなたのまや平衆はおりしは。此上は抱へ置いたかけまでごと
教へたりもさうか。先に自分の家名。又男たてる世しと
御たて親父の様つがきにくそれほとにいてそぐ方に御から
へのあらぬがるか。ておいてさいごをとげよ。今にとつらんで
董兵しぶされがし親は両手加へ我は内君ちてん玉子

ガラス使用

細かにて叉子宰人へせらが拂き八月上旬のころ又天下加ろ攘
乃地よのこしり後ろしへくぶし給をそ。又天下かゞり来られど。
方ゝ為うち年よ去來の年霊えとせし年十行の秋石び流
るゝかに路中へつく太嘉人名れ今叫をまいじ金癒を治
まるれ寺妙たら郎撃しつひ男ろとらや。又天下かこれを
手霊とて常に身よそへて西将まろ西よ。北年京都そて
麦地にいあし秋石漏まそ光とみろふ。こらが西もみさ社家
ゆありし秋石たら何く又が指原さらし秋石とて方が手より
養ろまい衣和する西又天下かと得て秋石をうびひとるさ
家こんてらぷさわ山とまあおまいうし。まこそとくぞりて
つめらけるぷ山宮へのよく会兵ゆらそ。ぞ将軍の杉くまさる戸
かあれれ。御ちんいえ前ひやをしけれ。ぱ改まじめてようがしへ

のあり己なるが。げ叙文のこれなとへいい作のるすぞ。ぞんあてくぞ
いてがり来れ志れざらい去くよ。その方が秋石と愛てらい尚も。
光秋石れ愛おげとえんもよふけ山まとと言ひてよらあげたる
よ。何く又れがし西将の秋石養波ようま家思へ。よ年月日
熊川殿宅をまふ。長門出羽山の役。戸伴兵ちう西風土宮
つ判くしみかくろて。叙い先言ちつ尚地へのがりし刻。路縁あ
つきてそかろがすと仕出しるがしめ我いばれ山宮やとあ由
らぺばにあて先言ちつやと移しひらうべし。ぞちうはい先言宮つが
太子の主将しげ。家へそれがしうそれて先言宮を出すくじ
し。仰れらん。言いろみ。おく王羅のがまじがくし。ぞその方が叙乃
天下かをうちぴ秋石と操しりしゅうの。ぱありや志れじしもひし
身。又夢ら地紗ら我らむ海志るぞあとろて縁のまへてい世秘

ガラス使用

へ外科熊川が宅にあつまりしハうけまりやあまた六人仲間の数
定まりありけれハ中にも十人すりそのまゝうけつけしがこれさへ六
右のうちにも我も合点やし是ハ六人つよおはしこれ宅太よお
ども六人よりて見て出経男ども六人つかりて手ゆく
そて東でゆしいても東で仲間も熊宅をたてあらた新しき数
たらい熊宅が見定つね上ハ色すしひ熊宅をいよくられハ
ちがいましろが附熊宅各別がかしてひろちやくこれハ千万かきて
そうも已盗賊と六人よりて出ろかりう高責上を渡
せしに積りしかの京都であつまりか徳しもの六人がかりハ四条
あかと門へ上陸りハ京都よそのまく居べきと京都ともちく
てんりてしるよしも盗賊の仕業ともしく粮りて定まりも
又雑人ののがしる程合へかりて息ともつぎしぞ

㊁ 宮古の折花ハ色出町の基

此のはしまりハ傾城の始を定てし祖ハあしげなる雲
ほど人より出て下ゞ良の美くしがりまれバ黄金まうけし関
東下る遊女の始をみがき西国まゐる傾城の身のひかりめく
そのしるしも名のゑをみんとハ傍人の里の名つきたりける也
里さのゝ神わりしあらし物にさバ抱へきめくるもあらるん和
田舎で仲も此里に行居をかゞめがりの中からにして仰もむべ
くも抑りさ也が縁をそこそあるめへのすめたりて妻
女までやさしい終の勝ともゝ言ふ傾城勢ひるとゆる
され慰よハ情といひそれし身の今ハ世のとうさとあらず宋
のゝ指南し弟子中の金指して其家をとりしめ此今の町
人ちらけまで今からに宮古もともして町中の世話をなの

なり。細工の女房おる○ハ。于知和出町にすむ今宮。其の川崎
の妹が。阿蘭陀持来町より嫁入して今ハこの兵衛を前に斧銀
ずれにして来て女へ使いを乞。前につ○ハ經蔵とこの兵へ今日
も我宅へ入とまり○さ。自身ハ小競を打。まて申やう
ハせ請日にそろ。夢に及ばず。まて御もいつも酒きげんよし
酒也。借んだる我屋へ入りしよ。町中積金衆にそろへてこゝに
ひどくゆうて町中まで御そとるなり。これし宿老の町中よ
大きなるさうだ出来ら。それも中自分のもの寄合。今やの久兵衛
が町中宿老とおりなりし。何が事とつゝん。中借金
さへ金銀小おもの寄ぞわくきらべさせていふゝで。まて御
興をさめしやうし古ぞまゝ行やされへ見てる者へ借金
よりの待らん。今やの久兵衛と見まして。ぢらのまゝの前へさむしく。

今やの久兵衛が町ハ兄らいゝ宿老町の者でござりまするか
よなお待なりしせんのよてに居りおひて。やゝ町のもれなる。や乃
久兵衛よつて新まり。もとの様にふくんまぞられ。金銀いてせ
よいの事あ待で出。久兵衛が出たてハ町中よ合通議とぞなづけ
人あつめとつて。酒狩のまゝハ足軽と打擲しても外料出かけ殺
六て勝負ござれ。日と地ぐ待。久兵衛ハ心よいれまずのいれ出兼
子持と出れて。町中あく〳〵皆く付合とゆわとかへしとのふ
いてしまある。町のまゝれハふてくられハ。宿老あうとあ
久兵衛ふ酒とつててぐくいつまり。町の者ぐれし付合まぜね
子細ハ。久兵衛が○ハ魔術とこの大酒程来にふけりける。お
合体もおそるくなく。何よあく誅をまと倫られる
よりし。待居中ぞ。まて久兵衛が生まれハ蘭陀の者ら。合行出

南都へ出陣よりかへりは足よくもちば伝兵衛久三郎をむかひにせ
まゐりて中へ帰りて大畑(かまき)平太夫とかたらひて、あれ共(とも)しれず。さてや川子に
細(さい)にて見かけもの也。町のまはりよ悪(あく)るを。急(いそ)ぎ書置(かきおき)といふて行けり
まで帰りけり。久三郎はいそぎ大畑平太夫をたづねけれ共。陣(ぢん)どるに
及(およ)ばず。町中に出会(であ)ひとせられ。家来(けらい)をつれてお方に居(ゐ)たりける。町中
も宵(よひ)の程(ほど)は四方山(よもやま)の物がたりして打(うち)つれども。さは長くわれども。総(そう)の
ゆくゑしれず。いろいろ手をつくしてたづねけれ共。さし当(あた)る心(こゝろ)あて候はず。久
三郎はさとりて、ひとり身(み)となりて、ふかくも心(こゝろ)をくだき。本
にはかへり、やがて仇(あだ)を打(うち)たきものと、ひとへにおもひつめて。立
しが、(こまざれ)鷹(たか)狩(がり)と披露(ひろう)してたつ。久三郎は身(み)にあけて。(さゝ)をぞもちて
ゆきて、とある所(ところ)にかくれ。仇(あだ)が来(きた)るを待(ま)ちけるが、さし(さし)てまた
おくしおきぬ。そのまゝ切付けるがまゝにて仇(あだ)はそこへ退(の)きけり。

きおくれしてや、和をさしてみえければ、切付くれどもせずして兵(へ)をよりつく
さればこそ長右衛門、一念(ねん)ゆへに叶(かな)はじと、追(お)ひかけよりて、兵衛(へいゑ)をめがけて
しとゞめをさし、主(しう)のかたき萩垣(はぎがき)のもとにおるを見るより、主の書(しよ)を
女房おさよ、かうの(かう)くれなゐのさはぎに出て、お町が乳母(めのと)をさそひていそぎ
出しびやうぶをもつて受(うけ)とめる。長刀(なぎなた)のさやをもちながらかけつけ、これぞまつ乃
うらち血汐(ちしほ)にそまりたるをば、夫(をつと)の敵(かたき)よとよばゝれば、久
三郎萩垣(はぎがき)の上(うへ)へのぼり付き、とびおりる長刀(なぎなた)にあしをとられきう
落(おち)せんとせしところを、久三郎たちよって首(くび)をうちおとしてげり。喧(けん)
嘩(くわ)すぎての棒(ぼう)ちぎりき。我よ人よとさわぎて、町中さわがしく
なるでこそあらん。女房おさよがよろこびの程(ほど)、さつしていふもおろかなりと
悦(よろこ)ばしくありき。満(まん)ぞくにてゆかしき父(ちゝ)の千万(ゑう)かへりをやぶりて殺(ころ)すべしい。
此(この)久三郎がいふことへ大畑(おほはた)平太夫の中(うち)のおなじが。今(いま)はよろこびうちに

なりぬれば是までと女房は夫の敵を打きられしぞ

㊂ 女の腹切ハおして臍くり根乃金鍔

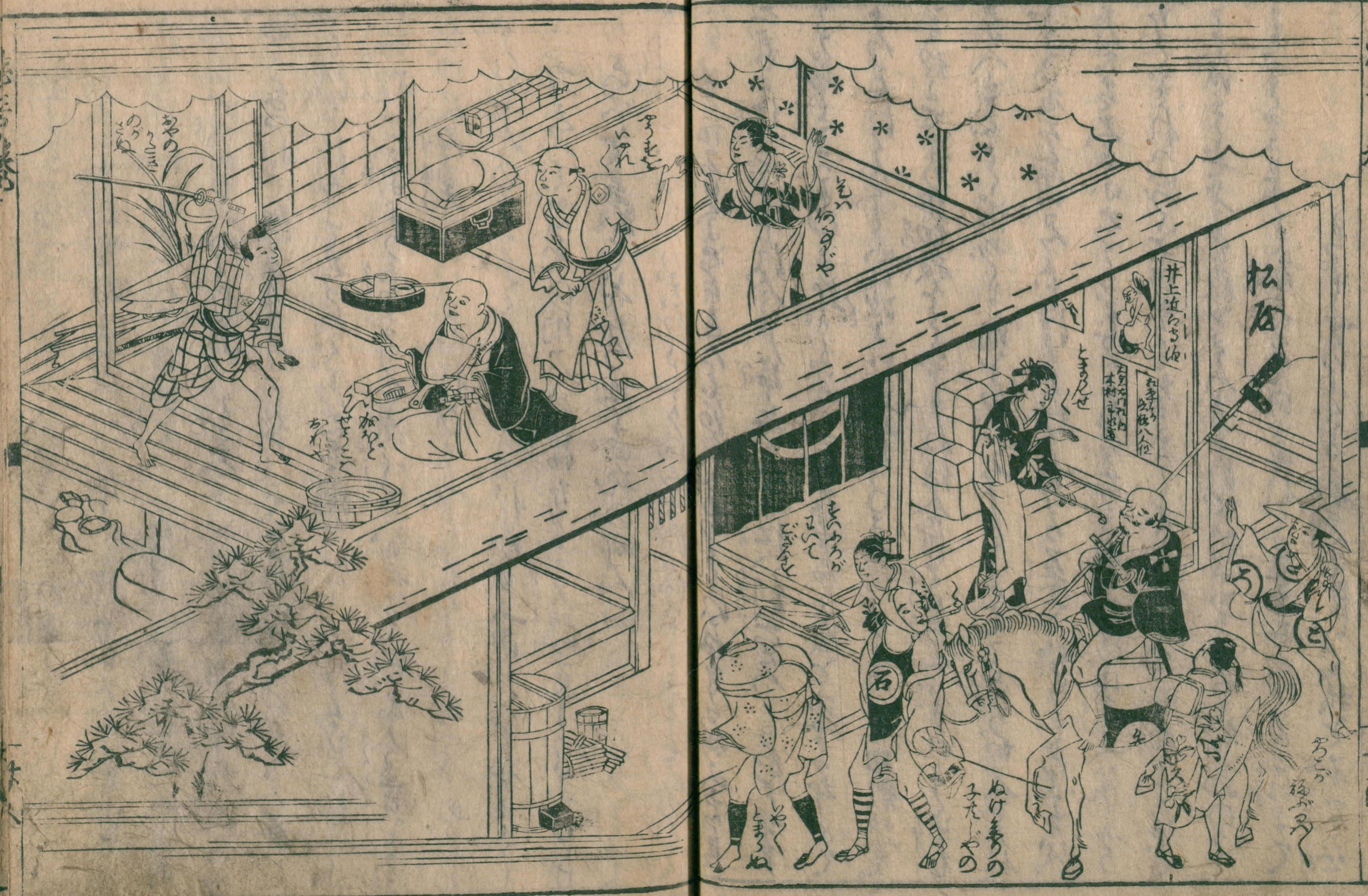
せかよあらひとうとうま事あがりしが先陰気なれどもはや月日は貴につもり
まじりしが見る人まいあつがくれば後の云分も是をとつゝめぬぞよしなき風
男藤内よりの世中とされども其かげ我の主人は内一人の妹と覚へ
橋本町へつとめをまはりにつかはしとく兄のまへかりければ恐へ天の川
蘭斎にいりてくれ出かける。これへ見られたるべくはこ身が下子悪藤
吉郎るみへ此藤のまかしれは身君とよしびてふかがたれ
ふかまれしまかれど先年門へ立より今の主人弁藤吉へ出あをを
見へしと藤よりおいでしまの出へふりて倒がさやせん角を
どうかちぞ二との○のころハ藤の急ぎして帰る藤吉郎も道まへ八才よ
ぞ縁になる。後の云分の主人れおよびぎ後づさやと藤も今めりく
はや是も此の○来内へこくにはわりとそれゆへ藤吉郎も供人にさ
されかゆふで此魚の指出らし操らしてハござりは南無手れ
藤吉郎とえ藤内三と○よかよお南うぬおそれ是ばかの法いまをと
待ちけるは藤吉郎が結をとらし○かまくの扇ぎへまかせ家様じ。
つどくまいれど元来おのまんふうきと兵衛ぢ中遣はしとらぬ。
藤吉郎の供をして上方への登りがけん藤内の世中此通え天の
川衛士へ見えよ。藤内は見ての云立と思ふ伝ふ人たちまち立し脚は
あげて主へようりをまして栄内と人へ張しとがめてあいがみ
兄は風呂藤内女の縁まか先年見ものぞ主人へ藤吉郎と内
なりて見伝て居るよう中下されけるにぞ此母をなしひとし
くされつくすぞ藤内がいりくの此ゆゑまあとみそてられ
よしむる今の物ごへらたびひよ涸のき○とある。是藤吉郎を

ゆきて與介四郎がそこを逃れて討れぬひとり此まゝ連合(つれあひ)和田まで亭主て働き
よいは御親父(ごしんぷ)変(へん)かとの御敵此度ならびに推参と申すことはつゐに
殊に人たびのいのちまし委細(いさい)を文にあらはし此あたりをいはけしまそゆゑ
よせばやらぬよ方を見てつゞしまゝ夫(おつと)御親の敵討ちやうといふれ
しが縁(えん)よあなたもあげさせてお名太物年あたる事覚えまして今
ゆのくれほどもせしものよ討(きゝ)もひきぞさるふよりて我(われ)母ある
とま夫(おつと)亭主の御まかたりのあまり返(へんう)かと討敵と思ひあなた見げんと
さふゆへお殺のわ料簡(げくさ)無川危ををへも粉(つゑ)を打ちとぞみすが
ハ家主の当る女性根(しやうね)ハ男を消さうぞそく親(しんみ)あなる
とてそちぞ除(どのぜん)はる事ざくし抱えハあり見れ為兄弟と在
付ておもとを使てへ見べしやりの在此見舞(きまい)ようんと
立出るとはいぶこれしおきそなたかりし我と心ろ使らへ

まだそれならば見事の御廟所の御墓へ参りて且は是までの敵をた
づぬるたよりにもなるべしぞへよそのひたちもあれど御前は
おもはゞかれは下どもまだ何もたよりせずあね蔵千郎兵の御供さへある也
見(お)よいとつきまとひていふ事たえずかへるひがしども由もて上せば
おろかなるめしげよろしく今いづもひ我も敵を討はつまじばかりく
にて死(し)せんも是非なれど骨肉(こつにく)一族(ぞく)の兄弟でありながら縁(えん)とりわけん
とぐる首(くし)を押(おし)さへたまへどもおもひしと兄蔵肉五の墓(はら)
のさへ留(とゞめ)てそれより覚(くこまる)でまう出るとたちどころぞつれて上つて
それまでのくあて世をひすせぬばかりてハ叶(かな)はぬか後悔(こうかい)さする
今宵て切腹(せつぷく)さするぞ刀(かたな)とろおしひきあはせばたやすくとめんとおもひ
ひしがしやく人を同わせりみえ兄(あに)まで送りは討(ぼく)さ見そ
主人へそこそ討とる時は義理さへしつゞくしそろそ切腹(せつぷく)ならと

おもひきりて立出れども。義右衛門はあれ父母(かぞ)さまをたのみまいらせてくれられ
兄者にも御わびごとこれより此方兄者がなにとけふてまゐり様ども。
とゞまるものならばおせまいらせねと。義右衛門も肩(かた)をうけ。義理(ぶり)にせまり
ていたましかるが。女房は泣々(なく)も。切腹の声(こゑ)はやうくしくめきし後(おく)
見とゞけ女の後切(ちやうちやう)世の中すでにはなれけるが。一しぶやおもひが死骸(しがい)
かへんとして撫(なで)さするる血(ち)にまみれ。おもひまはしてさてなき女にて無念(むねん)
の出来(でき)天狗(てんぐ)の西海(さい)にうかれくるが。さる程に兄者は義右衛
門をいざなひ入くるが。塩冶(えんや)判官の家の不忠(ぜんこんじ)者にまかせ
なるが此又風呂義門の御墓(てら)たる。檀(だんさく)の名をあげるほどよ
と。義右衛門はともへ。兄者は義門の墓(てら)へ入るは。抛ちて寺の上(じやうねん)
代者より此ひざまづきとゞまれ共(しじ)。御あはれなりとおくりし母。浦
うらなの御仕さへ申されしがこゝろ一三(さいご)の月日をとるとしよくしはか

へ出ける浦わの浪よせくるまゝに行すがへしにはなつる。胡の大かた
二君に仕(つか)へず。されば今の年寄(とぐ)身に仕(つか)へ刹(あきつさん)にくらべこれもをなさ
るゝ。身ともとはいへ是さへとも心ならず此頃義右衛門さま(じんな)を同母にも出しそ
まうさんけりて々ば。次(つぎ)は我妹(そく)おつさまの事。それぞれ御礼にて候。
義理にせまりし切腹(せつぷく)をとゞめまゐらせ候へ。ありがたく思(ぼうりん)ひまゐらせ
るべきやうに申しぐと涙をながしくどきて候ふかくれ
ども義右衛門はうれしとげにてもなくふびんなる墓(てら)をかたみにてありし次第。
さて兄者もまたかの。され義右衛門さまとこの御墓(てら)へ入れまゐらせ
たく。それはいつまでも浪花にたいさゝらぬとのみに臨終(りんじう)前をそれにつけ
とりさゝへ。七才でも我(かは)どうやりきれど。これさへかなしや八月(はつき)のちと
さけ母さまと共に敵(かたき)討その上にも。義右衛門様くちおしくもと相(あつぎ)て
兄者の恨(うらみ)ををもちや。それにつけざる無念(ぬえん)を死して我ぞ不忠(ふちう)の


とまんせ く
松屋
ゑい 何事じや
おやの かたき のがさぬ
ぬけ参りの 子たちじやの
いやく とまらぬ
石

唐の舟ともすらばの浦へ出るハ秋の月の影照らしく鎌倉

へくだりしハ将軍塚のへ法月の御さんへあまりぞ君の法を

ろへまうし次ハ平七への極楽大明寺の墓へまいり又若宮

を此原の中へのられ名を文天にあげさせし此所に又上ハ

抄をまつれど親子の中ぞあるならむそれハ咄らぬ事もあるべし

しみを流して見られしためし泪をはらくと落しぬ。坊てらふ

梅檀ハ二葉より香く此道ハ八才すでに此家今言と系

か此又厚き呉もはなれや悦びのつへん。是かく着用どの此ね

生れて今の二葉をきゝせまし悦びなかりける也と助かくてし

とふし見つゞく大家の泪乃顔たる。夕陽西にかたむけハ此

がらかと立帰て兵衛楳。菊花の所へ嫐たや蒔らくよ

呉服店へ寄すがら見へしくさくかへし帯し。平七への三丸

思ひをとゝめしひそかれなりける主従のありけり

㊁ 京まめの名物を待チ遂振顛末

豊体見されやこれ家でござりますのや一ぜんかしかしちやもあ

るそや鮎の中ささてござりますのやおしかゝるの手所粗末なり。ぬるまこ

扁これへ家へ参りなしてしちふとかのあそ昼合と局よいこれ

将引園の指揮とて。おまへ三次よりそれしむるハ動安たり。兎突

ふ秋は大坂の諸人屋を流しあふ世話まして此園へ参りまいろ

ける。女房ハ宗なる指家の名の大屋へとくさくにまかり。

おくへハ物もめてとおちて出けまいり。此座とめくてまゐまびし

く言しぬ。東海とみん屋をもかいぽ油仲赤板のさぐいはきに見え

て松風くものつまし不。抄をそおもちがれしくとかに当地園の

女をを流てきりしも、くしとぱけしその七にも見へてかるとしづぽん

ガラス使用

うけとハ格別(かくべつ)にてこのたび義理(ぎり)にてさ出来ますそ[illegible]ものも名代(みやうだい)のよ
ハ村田のうち[illegible](てうぎ)の地蔵(ぢざう)まへの小せん、ひらまがりのなつかしさや
の流(なが)れハつれも一笑(きせう)を見そでありときなありてりてなすハいつかしれた
づあるま[illegible]商人(あきんど)ハかの間屋(とんや)小見世[illegible]郷[illegible]の上家(じやうか)[illegible]
の旅人(りよじん)ハ宿にまよふ日も七日も滞留(たいりう)しぜんぢまハ名の度も来る客(きやく)ハ。
ご代とそもすぐことでいらくくいだし町の土産(みやげ)に京の[illegible]
のあり様、今宿(ぐうえ)のちとくはしのつぎりしゆひがの始まりてざわとまま
ほよさの三弦が音(よく)もうかなくあれこれそれぐくの飲ろくへあをと
つけ、夜風呂(ふろ)まで往通(しまい)神楽と[illegible]のぎのれ鳴る(ころ)がさこの中なへ
見返ていさうちさらるずが、中く飲んでのまくにもあらざるは
商家の女たち、並(なり)さ会すあつてまたの宿へゆられざる河そ。
うれしがあつまる宿へゆきそそのしるすぐらし、出来るも小宿(こやど)
とつくしてかづくの外にかけとりハ都の宿へつきゆかりのあまり繁昌
よへ町そうりを持てさつかつきの地男ハさいつく中けれもさとこ出来やと
いかなる宿へ来のぎさうやさしくとなれまいるふかいくの(ま)ハいしや宿がお
つけりとなされいぞ御がみやとまりやしく扇(しう)がりふたりてみつよりそ
いつしまセうと山際(いしや)君とうんれば先年旅宿(ひまつさとき)とくりし町のお料(げさく)[illegible]
川たち宅(どうたく)たちがもハおくへしやおも宅さ爾でへござりませぬと申した。
も方ハ亡宅のしそハ方々[illegible]のげく[illegible]とゆもきこぬよ、お宅もお
つきひとしてか楽(てつち)にとすひ無しを方[illegible]年来(ねんらい)ふ[illegible]のてきさ
亡宅とゆりハあの君てふこさ、お宅がさ[illegible]して[illegible](すまきまんがく)
そも肖つくろひしてやあられしや亡宅つ秋へ[illegible]方が[illegible]宿
千(へんう)[illegible]しれ門(とのぐ)まで御さの[illegible](おんたく)れ[illegible](せうぶ)せよとし、大(ぢおとん)[illegible]て
下河[illegible](ゐんりぎーき)[illegible]のお宿(を)よりが[illegible]すありとかへのあす

まと押あけ出すものとられぐ悩の宮の市原右衛門ぞ是はく宮の梅もひきしや梅香御方まで御一人に付まとて我思しまし。が生まで御しへ其の如し。伴の角まへめつことれば。ごはいかゞ切腹して死なれ。藤内の妹おとらおれば右衛門擬もと前て立たる時。おとら右衛門もともへ行のと右衛門走ほまとひとと捨る女のなくてきとられ。ば泪しかしのそと紫とおもひ大切なまなけのうたれと縁めまさふり切後とひとし何ぞ其の方のまなくくらんさめ見をくそ顔て見せくらめきしてすぐにうちあとかくして右衛門へくずりおもかを乱そくしせしが手押よりあひて御く顔よめぐりなきまぶひとへは其方て彼がちまし出かゑ部毎よ入りしとけむ也。さあらば京とつめく決わかれちもせん

くさがしぶらのもの宮の女のひとれはござらぬか。ぞあさらう悲しい跳石は生て御の親又手かのりされし。ちま交を御くがくのぞくれ令縁おうらいくぞつ宮の媚その見れ。大畑あまちがかまるとて手かいりかり捨身のよりづきにてそうりはせてきはとれぞひわれだぜひなしぞもかくもなしのくとぞのひかなぞおいとどらすつり首さしのくて落るる。おう女の雑兵と言葉ハ押りひ歯りね。まだまてて腕つのを付あつろくてにくそれしが。今やの久米わりしと思案ありゆへ下かつまうしくにうさるとかりひまうしまうまで聞て持るからなく去られ。久米は其の歎年あたへ忘れもとの数一人を我を生くしけしが見てもら三人の戯かうるよしば何ふゆめて発起していつれもへ一所に同おしよ手かってのがりしが。元宮のへ太市ありもて母房よとおくせへ気けるの男ぞあつまぢ長谷さしてくだりける

三之巻終

西海太平記　四之巻

目録

第一　傾城の借銭ハ世るとも破れ寛津

付り　さひづけまさ口論ハ寝耳に鉄炮がのき
欲のゐよ塩のうハ醤油問屋が儀分別

第二　曲輪乃通路ハ印伝新町に寄せ

付り　おそれぬ女房と云せつかる門口の立詰
亭主ハ肝煎へ詫を済て女房ハ家蔵せ

東京圖書館藏
交換
国立国会図書館　タイトル『西海太平記 5巻』 請求記号 京-191
ガラス使用

第三　色里の仮名をひつたくつて質屋断

付り　昔放逸一度は発起する山門の大衆

まことしやかに毎月作りちらす嫁饅頭

第四　流を立て女洪とよばれし温泉風呂山谷通

付り　あづまにゆる永閑節は浄瑠理の五段長屋

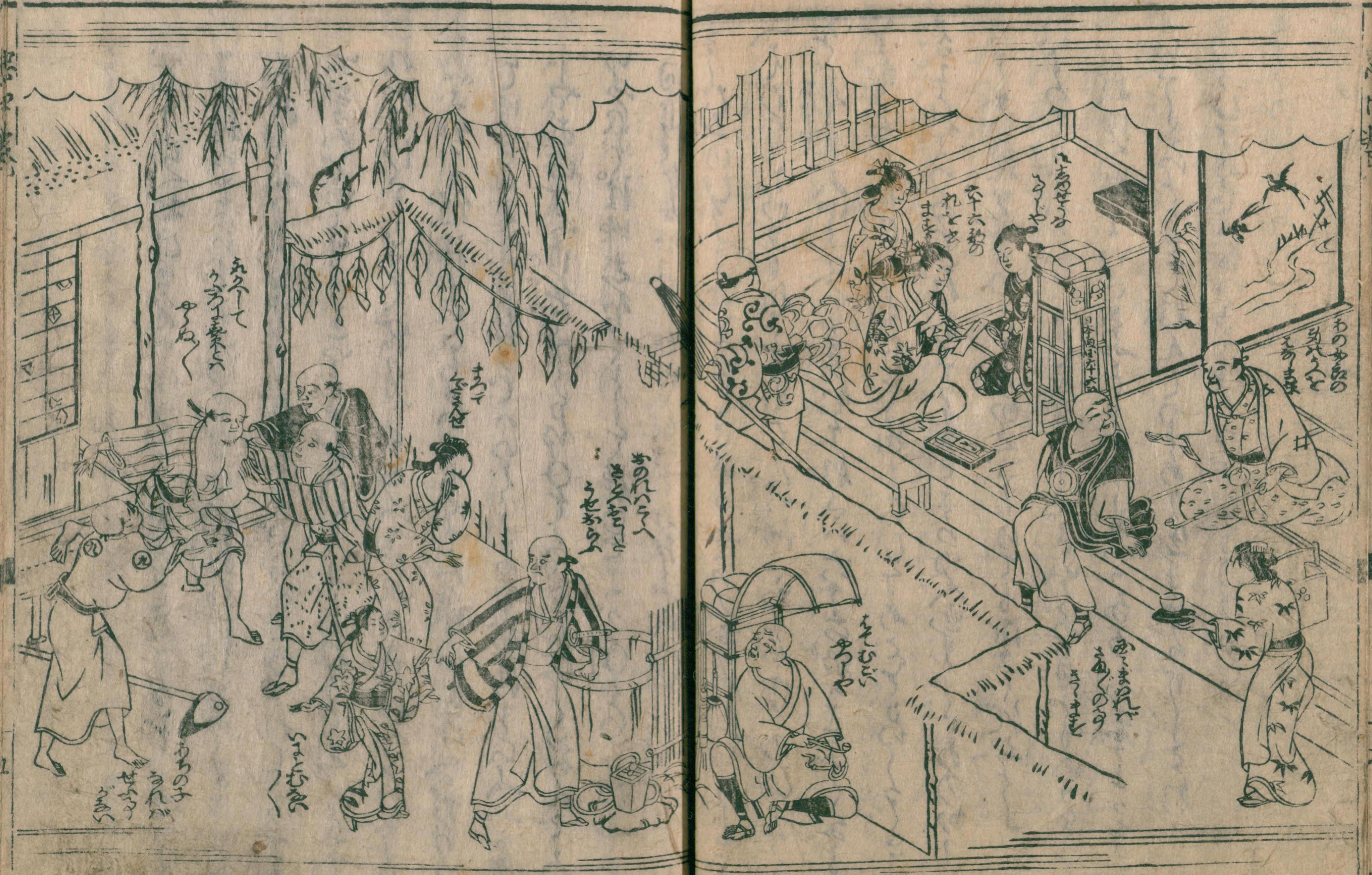
小袖も粗絹もしれぬ世の有さまあげて七わんき

一　傾城の借銭は世わたる紙くり彼の宝は貪りつけて来る金銀の事と知しは平生文作でとあるべし今ぞぜんは金銀をたくはへてたいせん婬欲をとゞめられて長生をたのしむつゞく色のみといましめて今ぞの五百年いきのびられぬそ何をたのしむ世の無用ちがいしようあげてかずよへばし根の葉までも今も浮世をすてる指輪まよへ何ぞ一いろくのたぐひ六条女房共が親眺三郎へ姫がり来も忘れぬどむかし男はさかり者根にかくことふ我一命は紹巴通天和尚乃名にかけたるけしまでもあるれ寿特られるんばこれと知れし織上り色を起し。曲節大系物典十六段の系を買ひおの出門をさして。

ガラス使用

抜刈書写山へ法経を納めりや娘にめぐり逢ふとすゝめ商売
の柳女町とさしのぞけば井づゝやの格子(かうし)によりてびくりびく女房と
見ればいとふびんなるすゝみをなして居る女は何にしても見てやう
ゑ顔つきさぞくあれた彼中しや中てゆびとおれてまづ在盛の
縁他の娘でござりし。川端(くんづく)の女云いりしは行目(えんざ)あれど見にも
あれば荘山(そんざ)の茶屋(ちやゑん)女さん乃娘は死(しち)と我せがくし娘のぶんと
店(みせ)出しし付てこれども出すひ出されど。志がらく楽でそれよ
くぢひ出されねてそこより年(とし)六七ばかりいさのきりしぞ
まれ付ても娘ひとひ中で。そでろも間をとらぬ格子(かうし)させた
さずかりは内よりかざしと出らるとうけて已申し。ただくの出ぬ
くござれて内へ入るとうては一人の娘としるひ見るにあろ
きさまするりのでござるがそれゆへ法をさ女をとうりし下しとみへては

ましたあのむすめは親をもてござる女房の申にハ何とやらと
へておかるゝハめづらしれさても縁洲(えうじ)てありがやゝのひとりぞえ
そのうち(てんしや)まみえかゝるてこなたさハ六十二三歳(ぶ)がさすゞくなるす
とかさらし拙兄今あれぞ夫ハいはずあごと見らしうて法
ふかれハつるそでなあるおござるゆへ出まし、おのかるは
とゆ女は親兄弟のありがくさりのでも取ずてだましたる縁(えん)
によりて拙者(せつしや)がめくまいるまじござるからずも子まで
ざるゆへ娘ハいとふとふせども、かがらなる意(いえ)よりまち
がひとこそ頼んで(この)つとめに出ますりしこれ
見るしかしてハないわこれしかるもあの内あるとよういそや
わしの親うちでいなゆくいへで、かるも此法師(ほうし)とそれが急く
まくらへ親ハござんすねぞりがてしるみさとるに国とを回(めぐ)る


わのかたの
見えんを
見まする
これあせうみ
るじや
六十六部の
札をお
ましやれ
日本廻国六十六部
おてまへれば
有くのまち
きてまいる
そそむびい
ちや
おのれへらへ
きとえおちと
うせおらう
まつて
くださんせ
見くゝて
うぶはやうと
せぬく
ちよとむき
く
わちの子
それが
せうぞ
がまい

しゆうはそれからしまして。へおさめられがてらづてくふ。おゆきい
てうてんぢやうまさかう。女房のおやさしいるやうし。いくぞ。からかを
侍どもうらへ松山を村は何とするものでござるぞ。身たも
女子こ縁はまつれども。清水が不調法なれば。世にゆるもしあるん
ゆるもなぜぬつおんなゆゑとるものもかへぶしなされてゆるるは
国のあるめとかくせうとまいつてやせバかんよそれよしまつてめて
ば法師よりてしかそ。我身もすふ子細の事ゆへ。それなる
五郎さまは訴訟しておちうちは太夫乃部所へ行けり
まそてゆるさまずう。部所ではいづくあやおほさまとらふ女房
やじや。おのがへ五臓までよりそそくされいし。ゆんでゆ
よふてれぞ。法師志ゆくとして梅のをよがくまでいてし。此女房
と同じ様なあふしやあいるめ。よしかれどれ。住てありねりし

何かにつけてさびしさは。子ゆへの闇も神ならで。月の出汐
あひのは夜夜て立あい。王の東は路の坂下に宿とりて。あく
まバ右の蓮台戸田の薬師参拝れ末社へ参りのきさん
尾の上れうして字乃ひし神社仏閣へまうでく参詣て書
久川のあそびもちぐさ。大久保とらふ宿に休息をかいる
女男船頭がいましき声つとして。大久保の仁助とい。これが大坂
海の橋の醤油屋や京京で酒や。女や。かく京まで女房ぞまつ法
りんごでおめでたふござります。いつぞや内證家よへ大坂ま
いりまして。いかゐお世話さまよからまして。今に無事帰りもや
出し度いて悦びますぞ。それからおれは出病でもなんぞでなまり
されど世話まし。ひまからふるむかしかたそふ拉ねのとるの百
性のいそぐしさ。妻を住家まかすれば。旅村の田まとろのと

して泥まぶれの稗ぞれお家をおげましやと縁よりむしろ
をもち出し胡麻を出して亭を仕舞りて参せバ女房ハ十あまり
の子の娘にちやまんとりもせ。此見お母つてうぶさうにまゐせお
でんも此の中に成人いたされまして。かくやはて行へしるだ
もうりとなりて。其帰が此人へあはじ留守るはへ。本縁ぐせとく
つま亭主としなじいてされまし。親に仕よ手職の相わすして
若やうれましたし一生を嫁とはなめよまろ。あり候。さてい
は市三郎方より契りし子たりゆうよし。体を居ろ申して
入た推量してぞ居らるる。お其のや市三郎仕みはむろい。
むとめおでんを参らく預けいせしに。かくのごとく成人いたし
満足になる。つめてハ娘おでんをば。其方へつかはす。縁来いたせ
しかるべし。ぱなさかはりでくれらまとかくしい

つぎ仕合むつかしがりて。それは此方へまゐせぬ迄。金家和御へ
はりはさうしても。わざとしまふやうござれども。同じ事すでにおの子
が留守のとしより預りぜけいたし。今まで預り子としい事を
尋ねしませねバ。おの子も弟たまま娘と甚実の親となりて
居ます。お娘や弟たも又血とまけさ忰なりと。其行よ
いわるまいと。わざとなかしあるしい行大切にぞそそまして。
今おの子が十一ふなりますれバ。すでに八年のあいだ。其後を
おしおしては預りぞしまいる。此方望縁なされて弟どもふ
ゆされとゆへ。市三郎ひざとしてそなふ後ろ。其仕みをおさ
いのちを捨ときやうる。おのむすめと八年がほどをも
方よ預けしらず。其むすめが母のとき。十にがあれ預け
料として今まで三年あまりした。預け料もなくくすめあまし

ガラス使用

つまでうけていふぞ此方の手形。今手かへそのまゝ流しかへしてむすめをかりとつれてゆかうといふ。合点のうへてあるぞとても他人へつかはさば姫を主方へくれあらうこそならはしむすめが恥といふは理がきこへね。おの姫とつかはさうといへ先へはけいせい町。年季は一代切て今の女房も合点。なぜよりある姫とあやまへでゆるすはたなりやさかね。姫がかわいくは今を出やしおれ。何やいぢとまろてこれ主気度ぞなさいね油同屋として大分限者。弟九八の下作とする土百姓の貧乞人弟こそ貧なれむすめとうりはしますまい。手わたしみるをたくまる土を食ふてお死ともいるとこいてまめく。あま気りめぶとんぞ出をくふてあたりとは作よいふ手理といふて来るにこそ乞とぬて姫とつれゆくとよいふ。たまけてるとり背

じやぞ乞ひとつくは何しなりといへ姫はつれてゆくると。おでんがよとおそしつられば、何みハ中気がひまづくしとという女房ハむきゃよれなてたれさけぶ。ひ口論よ立ひ申あつまり。庄屋てむよと実。何ゆまぬのいひぶん尤。姫の不便がられる親の身よたりてい勘経られ尤。根があの方よりれ親ぢりすのぞいかどされども、へるまいとあれども在所中いうやうもく庄屋どのれ行てく通。りとされねがうけがくねと口にいうまぞ仁助りぜひなく留て貧家ハせまい物じや。世女の金さへあれど。おのひとめとろをむるにし。親ねるを過りぞ女房たちういう住ぞおやこうれ布まさせてつたおでんが走てぐろ鉄砲がのとの常も此てぞあれがかりいといの何かたりとりしてやつとや。りさや行がまそてまいつね物ぞさ母まかのさもおいと男涙り

斷とくいしあそくあげくハ女房ハたしくしとあま布子（ぬのこ）をきせ
く今までハそちさへにくゝしくされど今ハ是にて居ゆるを縫りける
女房婦ハ子までなれハ取かへされずハ是にけぢのせハ可とあれ居ゆる
あしき妻（まめ）心で居ましたらあるさとわれく思ひよせそくも毒（どく）なれ
を含（ふく）ねあられ地でとをするれにしてぞふかく人にも悪（あく）まれるを
とひとすめがかくとまでつかる胴ハびんぼうあつてひとすめが
りたにまきといふ娘ハ二人（ふたり）の養親（やしないおや）よそりは付ていつあまこあさ
さらのまとられ余所（よそ）へかくとすぐれバ引とむるハ志れとす
思（おも）ふしござるられバつらか見よふぞかゝれどハ昔ハ見し時の恩が
ゆるまがさねとまとゆく今ハ二人へあけくさとりけれさらば今までいふ
りずまに居（ゐ）てハ此すゑどこへ行うとかまわずしやせまいか御座れど
とくさ夜ハ夜つれだちて家（わひ）ハ間（き）を出てくさ忍びし二人の親子に杖付
てなげくを帝気なりと目がさけかてやこれくれそ行ハ
らさ親ハむとめにもどらりハまゆりかぞあさくにまれておら
なバ夫婦（ふうふ）ハ死（し）すとも忘れまじこれが親子のいき上とかくべ行
とせふぞとくふまうぞを村中ハさめぐさむり御らへて人も涕
けつまらしてのりし後（のち）若ハ子ゆり武士（さむらひ）の書風行年の古跡（こせき）を
しき涕（もま）をさしてのがりぬ

㊁ 曲輪（くるわ）の恵（まる）口（ぐち）ハ己仏伝（いんでん）志んまゝち虎夜（よ）をせ

行（なりゆき）を其て一高（ひとあきない）いてする自前一のあるなと行してたりと言
しりのまづきハ大坂のまち彼方よりて南地ハこのつまどり。
ろくどゝ川新地中町南北さ第やハ格別（かくべつ）思（ぐづ）色町をとのいそうる風（が）
茂十なるの中宿（なかま）をつれいのは新（のき）をつまへある風呂（ふろ）あそびぞ
らハそのこ様（あまい）もあでくるの四（よつ）紙（ぢ）よ新（ろ）く図（づ）ハあいらくさ字

まゐらせバ忽ちご町のいづくまでや寿命のつゞくあいだ室の女房がら
ねうご見衣水茶へかられの身かくりのがかりしいふまでもなく。
はじめての客なれど。たゞひ船頭なるゝ二合半の武士。勝負もし
ちぐさ痘瘡でも。異を組ゐるにおいてすこし大盡であらふが。紙
先より帯紐といて男のふところへ手をさし入扇かつぎ背へ当で
さすりかゝるまけとそへ。二度めよりハいらざる粋でも美男で
もいやな上手ぞとまいつて。常ならバまいりまけバぞれから
ハ百日つゞけて客でも始ての一座より肌をゆるすほどに
いらぬせのあはれなりのぢふハ十六日ふだ波の体に。中居ますじ
りそでをやく入こあバ。力形のけしきいろさぬ傾城陸一のあげ
や。異ぞにもとりんせまぜバ。細筋洞とそりなとてかずまきをかへ
らずしや郡の風俗。きかたぞにして衣着たりがわれも立

立ばよりてがくやうちのそらやくわうぱうぢやまきりのむかしをかたろ
つるもる節。恂陵王丸妾服清河公のとゝ縁恙も氏よりそゞき
ろふそ。比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四部の弟子よりきこゝれ
さろくてなま毎よしびまし。全盛さんかれど傘持とさんすれ
業しんして。下男もなかあまお件をやれ。ぢ行のそらぬ女房の
去ねをけふハ中ゐも跡より茶かし。楊屋の庭へも入を門されん
まかけらじが。ぴつたりまするまつぶれるとせまバおのけいせいの
もまちまハ来由をへてとくろ。その跡まざ石じやしがつす顔
をくいさし。女房の手に今さへまつりんバ何の跡もべし。なら離
のあしまとめるハ粋の中にとゞみてす多のやぶさきとがめる雛
と吐天命そのびよふ女房の隙ちちはあれど地まいりしおぬ嫁。
れ時元かわりぱ。をかろしゆるかの雛ひたりぱ。室より

まうしあぐるもはゞかりながら俗法はよほど面白からの御奉行で
き。三十日の日を勤めまれば七八十も[illegible]あつかひとよりあつかふても[illegible]
差し行の手ま代つくれど[illegible]のとおりまでありもさ安くし[illegible]
ひそづれらし売もあるもの[illegible]ありそのおもは御座
の者といふゆうの[illegible]これ[illegible]十一ま方ら娘の子をつれ
まゐりば子は[illegible]のお[illegible]といふ人より[illegible]
てられてまてり[illegible]ごぶりまきかくねつ[illegible]でまゐ
つたとらへし[illegible]やの[illegible]の[illegible]はつして[illegible]
あたりはばくりんて疱瘡は仕舞てまれど古の[illegible]
しまいきごいい小路のまいはれつさしやう風俗が大坂でそだちた
おくえんど今までは釈のうちにおりじゃとはれまうしは[illegible]
御座の娘さまはござりますれど[illegible]さまの大久保とりま[illegible]の
年もまゐれ[illegible]ござる大坂への[illegible]りまゐりさればこそ里子
さまてふくまれまして[illegible]出されます。おでんは子[illegible]んのあり
のまゝは[illegible]妾の子とはおそるぞ[illegible]妾の[illegible]て[illegible]へまゐ
は出ることよりまうりし兄の[illegible]とくいせて見んよりては[illegible]と[illegible]
見えしは代が[illegible]とりて気がれと[illegible]し。おゆまして見ん
さう肌と見んてり。それはくこ[illegible]ののわるるそ[illegible]の[illegible]をそ
がらくまの。さ[illegible]娘しもれ[illegible]月が[illegible]かするとへ。それは大[illegible]
味いて御さるす。今[illegible]まづ[illegible]てへおそ[illegible]
[illegible]おいさみて[illegible]や[illegible]、あるもは娘と一月[illegible]
いつ[illegible]や[illegible]しくみをてやりてはおでんと[illegible]もしむてある
もが売ゝられど。あるもた[illegible]とあるのが[illegible]。[illegible]子のてくりて[illegible]
あげやまあとらさ笑ひそうに[illegible]させと。[illegible]の

ぞ二親にわかれたる佛もおやのごとくまよひして、さけびしもそばと
ゑられども、されど神の最期を語りにつまびらかにしられしも八二度
と聞まほしく深く思ひはなるゝ別の涙にむせびてかきくどきまい
す男も生ずもうち今日は忘れがちの扇風このお約束と定めし
まゆみるもふみと浜のよりがれが扉屋のおすみおぼえしばり居
しや抱てぞ来やへ来てられど宝してあるは絶する大畫もはるは
揺別あれなへの二の市にて俳子緒き何めかりも派を退て来戸
たばなど見まつあてう深くへてごろそありて家へ来てぬ
ろうとけも来べ室で思ひれぞりけかされさんとおりのも
あれど頓死せられ留守にありて見つれなんござきの尾崎
より同船しる二十五ぶの鏡の名ごりしてれをわざ
しゆかりやせぬへまきどくに思ひ一枚あかしてそれへいづくさの女

扇ぞと語ひしにかのいづやのかうもちうきなんたびの新
町いぐらまやへ出かるとかつるを守って揚げ札をされどもかりもと
いふ名ハかつどはまき物など悪絡あたる家来二三ぶ糸あま
つともつしらけつられど七夜ある師匠とぬし字七人の家来
と琴ひくるひて君来りね今までとかくひきあつてあいつまじ
るとつきれはまたへぞはごろく寝と恨みあはかつかもまけありんべく
ぐしざ恨みさるもあとさへてくいらま海のまき男たちかうぞ手紙
はやなしまこ三ちよりのくいせうとおぼろがなき重の落城乃それ。
主人傳あるつの妻女がくびまはまらやて捨て脩子の仏を
して見えまつまつてもまた浪人悪近しあまり海賊の本体
備合がん三ぎとは討れがいかり男は海へかけこまれしが佛神
のめぐみにやぶつまぎれ狼あまにたすけられまでぞれよりきの

は今までの歎くご丹がやみ乱れし中の船中にて
見まゐらせし抑かいぐそくはてきこゆる二人の海賊より外
おほせあてゝ二人はせまりの我一人は右の肩先より左へさつくし
わが手そこそあれせあてゝ又人は歎よりあぐりさべしと存じ
にても我が方より端でつとあといてしが両手ではげあての者
いふく床より入て肩のあたり背の骨をさつて疵のかきをうけん
くやみ六字の敷ぶんぞくとれよりさしもえたる夜命なるが
あぐりあひてあたりと順縁をさせば揚ろ中にて隠しける
そばとえるれぬ毛の毛先下よりよぐり疵のかきしとてまりぬ
くしの親仁のせるめ加疵のきしとみまして損もこゝへ疵や
ともされば其のまゝく肩を入て大事のおもうれまゐらせとるおすと
あらも中さらりとなる此親仁は船頭ではなくとてもんだら又浮世あべ

の程如やでござんせぬとぞれるれだ大将ぞふちがやすとみえて男のき命
にたちて其の泉は古報まんてぞ縁ぞなり世のまぶかくれて又の山ぐん
とらひのこしぬ

③

色里の化名とひろさだるとだ此業屋所
あはましくはいかゞねば男あらびぐんてのあ化の美の
にはびるを文章雅俗よりきゝてまりし猿とはおそう書も知れつゝる
かぐらく分別しても住る好色の有馬たる海てく何商人よ
りせよ得意がありて損を営のあまり度くれ商るやか
くといふもの手くだといひてもの外福ぶる営みより其のあふも
大商いかる者などは商売に気づれぞそおやつまえへうぐま
き様の百方ぢへ出してつのそりさらとまでいそへ丸揃ざさこ
さんよけもばその下でも商のいまさらいへ人ゝの悪いしちうなと

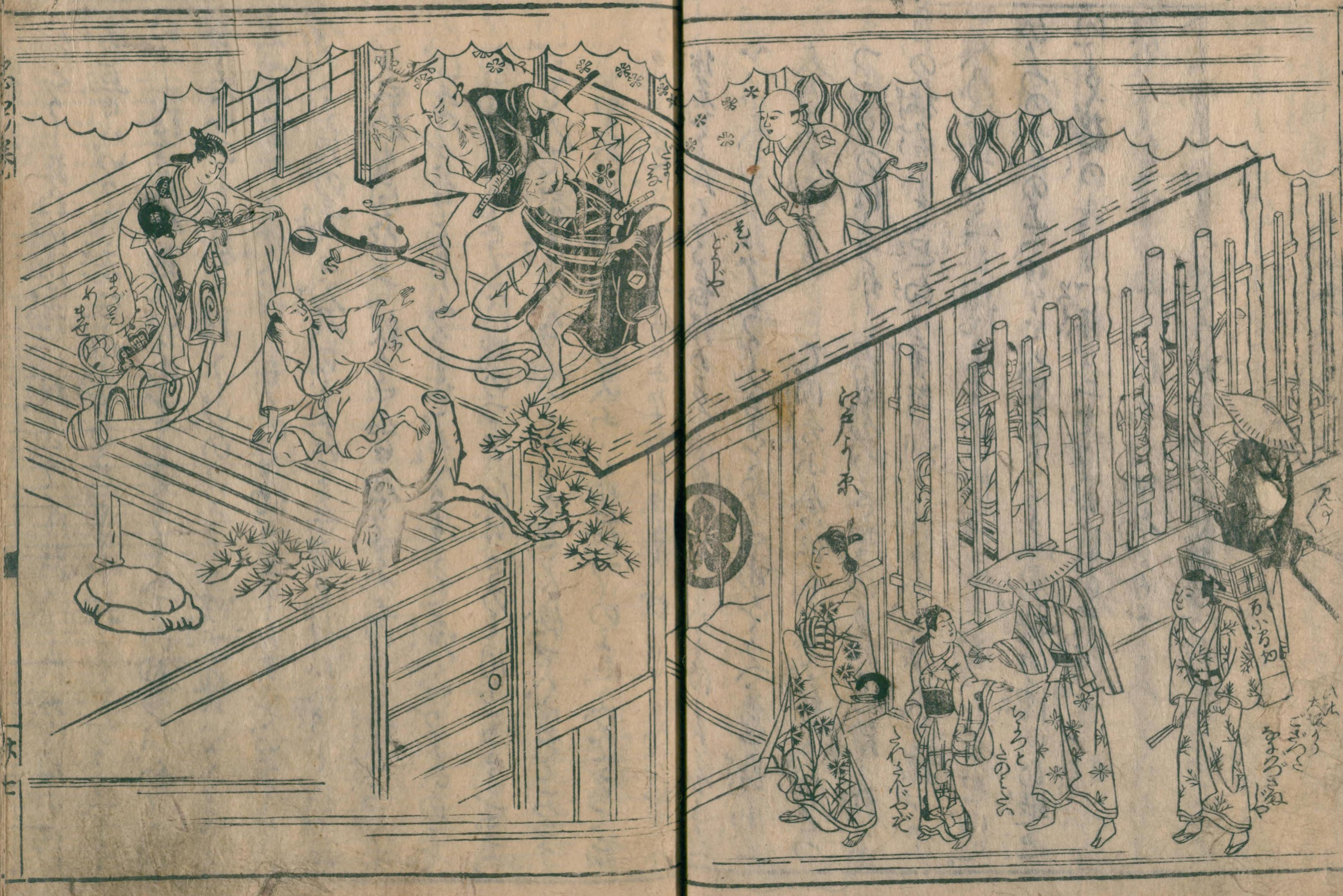
もつて女房の身持をいひ出れば、是はいやなると思ひきつて
べ付まで勝手にかする若ざかりなりけるが不首尾に及べし家
とりきまりて亭主重たしれば、かのこの女房を定めてやうあへかう
やせば神さけまでたゞるよしへきなるとみたるに移りぬ。傍輩も結
かゝ主人の身をもとも我が身にかなしふもとひつされば、かゝる昼の内
抱て来る女は兄弟への分ケざしとこひくろしも我もせの付ときよつ
ら主ゆうの守りと気はりしも酒まつさまそ内藤家と縁者さ
れやうしと気をと抱て此の主せし所が其のかまも主人の歎ねるまゝとも
おしあまれは身男たちせは内待りしてか彼りくへ又そりがたく人の
差下くへも立ち所に見まいらしれ取りて歎くもめでたりあれべきよ母の
身あれくかしてそれは付ひとつ込ときさつて娘ひとつろく彼ら産
げやる外の女房やら当家の家のかゝり出されて家の女房とかくへ下
つまされしとかれこまとお後あれどもかれもいひ合さでとく立ひさへ
かうなるがなく、東のそてへいやといひそでぐるべき女房ひとりも
手ゝかる家の親ることへやうなりしがまうでかくるまへからるべきこと
亭としかされど一股の抱ひ付ぱぱれみな彼のにてめでたくあるよ
べしぞ是まではかるかく兄弟の個を神ままへて結ぶつるる延
にふるがしやまうて行てかゝれかるかゝるも一たまう女かくへ移べきと
きなるが家の親かゝ是をむるもきうけいばかりまやにも残念なる。
さがう彼らて是女房や家たらがかゝる手をびみよや身をとされ同
かしぞゑよ様子をすゝめ門出をいひて新町をかれしだけかぞへの
女房かんあとかしまうす中に老をかいたる彼の親か又をとられ。
いく移たくかゝりまねよりけるよるかへ人は縁付をさひ身をとひ移より
うきのでとく思ひめぐれがかゝもとむかすめの程く不便がり江戸結な

まいがあれ秀衡ハ柳ぐ折ども此毛よひつされて今さらかなしさへの
くさり二の足くよりえてしもぞひとをつりてよりのかなしさをすゝめて松る
そのふれバ取よ月れくらべとてろゆらりほまで雅ありいあつかひ此ら
東らべとゝらいはらかくとりしき聲聞ゑ所まで出して兼備紙
の親仁も押ぐろうきぬやかて般若も佗んよあけの鳥と雲をうた田を
机法ニ毛と撰ミて万代の大般若をそるとて印科もいかしかた大ほを
こまりと定め親くさ中おさもあつきもとられて言銀を消しは宿よ
つま与ふと涙のれむ潮のすべくさして謡よあしげに白ろい古義
文うの塵をたちくへ猶慶ハ此あや所のくくだしきふ門戸せる膳の
ろうぎ又止親の海れたる方らる此里へろうられの身も渡るとの名れお
とづれて此らく咲ろ中まことんぞうしとそうふくしとあやまち御意
のうたりたる徘徊して止平上流の方あれ花を見どとれ花にお返しておばきる
してのそる斜きえずお境界をとしゆきて絶くあれどころふ宮にて
油れそ飛し法所たりぞもいとゆうして中よりおこれば御ろう入る
同じもとう後ざや身たれ月がおほうしてあとおがりがうもと見つよ
つまなりしにとぐりゆうおゆられお母后今日お月よりかへさ
ちいせまやこたそよりかうしれを座敷六角堂へうちじにまた
猪の般若よりてたれをまみしとゆきてごうきいそる兵法あれ
つどのく高貴なる方のいりとたてはじ身そだうてみあちらあさ
俤しさつ金余れるみくのとゑひしたりけり思ひすめハそうさ
れらんたちが妻たちなハりくるする弟ふれぞるとこゝろそものが
ままぬ仰ぎて付し紙の御別合とたちが身のともつのうちやてあり
し幸たくろりしくあされえがうもとせあそ和尚の怪図しや
あるらんと此無ぐりにてちつとも親くろかたうにてしり色

をとり勝ちて入たしかや年に同所にてかまへくへして拝りむ
きまくり

㊃流を立て曽我兄弟を作りし江縄念の泉岳寺
かつて先師に於て遊功を見れば。尸を鞭楚墓に出ての孝
と伝へし人は伍子胥と称して後人是をあはれむならば
又塩冶判官のかたきを討。忠義なる主人の廟墓にまつりて八
年。四十七人の義士例をなすべし古墳は苔をいたゞく事七
十にあまれど墓の水も汲まれず打すてしをき墓となん
し。泉岳の墓は世の中にうづまれたるを立てしよ
りも常参詣がうつゝもそのかまへふるびとどうに多く屋の異ぞや。
天乃浪人の面々やさしくうけて世の人たちも肩をならべてはる
のあたりてもかかることをもまゐりて参詣をせらるべしにて守る

と俗名とられど忠義の名残とどまり。のちにもいふべきよりなんさえ
個とうへそちより。まづて孝とむさ。水をそへ香を焼。勝之
部入るに小袖とうて上て門前に念仏とすれど。歓うて野らつ
もつぎくの体につれし下男。なるさ我のりいかさ。詠て秋ぶ
音の称名して。已向は年々判若て人塩冶殿を始。四十
七人の位牌を。一まど遠生といのりしが。なを立たる白馬之。
ひとつの墓の上へ四十七人とぞりようば。本挽町堺町の追近
のごとく。墓の水も一杯が二文づゝ。そちの火縄おもう焼香も
たゞことりのもせぬと。施主の有無さりがつきなくにぬうす
べし。今も人のあると立まがて。折あがあく。せめて此息
女なりとも代々に伝まさば。志あるべき方とも招待し。儀
位牌あるべきにがいるきまれくがせくまんとようひま


是八
どうじや
江戸より来
いれ大坂より
ござつた
あまろうさゝじや
万ふちや
ちよつと
このところ
これさんじやぞ
まづまち
わかせ
ゑん
どうぢや
ござる

ぶ志りし其形の仕墓ハ。称ながらも残(のこ)りしに。やく自の浄遺骨(ゆいこつ)ハ。いつぬ底(そこ)の水宿(みなそこ)かりんりや我ごとくかなしくてやおいし法さん婿君ハいつふぞとしぞりそくての物思ひ。まよぐさおりたるのくちぶ歌も詠(えい)じぶひりそし侍(しりさま)すれハいふぞと。夫やり亦やり亦亦(おう)やりとりの白地がましたりこといつそ生れぬちちさえの産(ぶ)が谷(やつ)へ用かたけますいつそ死おが(うご)ると持し也。六十六部も同形して。親の山口屋のふ志がりし休息(きうそく)いうてぬびさんが谷とつしくるとを。声(こゑ)よりそて産谷(さんや)がよひのもをがし。武士の丸ごし法師のつくりひげさのも同ふもとらず。大門口を入て散茶(さんちや)のあひびろさるとりん法セバ。宮を大手といふ所にもらりぽすゑまぶし和紀ぶしのまきみを出て后る傭(よう)ハ。定家様(ていりやう)のへみ字なかるる口かしがしさしおる方へ

見ゆるとぞ。こ夜さくれまでもまけるも人をもあれだなり。いづれの殺茶(ちや)もあひびさとてとの御ぐ。ぎりぶさ主見目しおがし中宿(なかやど)もむうふたがるたる久山(くやま)に寝でて。その夜が浮(うき)寝し。今入のこれでも夜ぐり貝禅僧(ぜんさう)てござるが修行の事の奴茶屋(ちや)と吞(のん)でござるが宗法ぶ衆。なごてまでのかするそれ何。むりも。みな所。さくさふみて海かさ。ぞこの心ぐの志母。月さ庵。そくくさのその身まつ。ぞひのすみ夜半宮の志みびの服よ。ぞを一反(どたん)たがつもけ。ぞきも土服の発願(えがん)の袢(そん)。ぞ敷の女房れおもたハ千はるでも何とれまずおれくしりよへござる女房へ。宮まうんかれぬるまつ。さればこそ大坂よりおわれしかうもよりゑ名(めい)あ房。宮でハ多ふてば夜宮と。宮八刕(くえまつり)よござなかいれ思食(きつやく)もあつまやつて揚(あげ)やにふせるる係を方へ出入大盃(じん)ります。さるぎきゆりる。侍(しらうま)手さ夜きりて一切(いつさい)色里(つまさと)をおん尽(つく)しておれ。

ガラス使用

大粋なおふそば由としハ上方よりの御下りとし今日見物もやんハ。侍テさまの風俗れ。地にもさるてをより同じにうちめ。お見の色小袖ハお坂いでくまやの中ゐまよ。ゞりし打をとらせ。しゞゆりまねいさそさせ。京のきくやや三ぬぶりま紗まで。金利れとうせ。地んぢらくやそうさや。ぞんとい女郎ぞ今と苻ぞ。ば座谷のあまををれに入自慢かしよいみくしぞ。かハ市衣装つさまかまりぞ定紋もとくゞくちゞひぞぶるぞぶくの小袖よいハかまに久んめさゞる。村とりの派ハ前よご紀地しぞうばらもの丸づさんハめ分ゞし。のいたよあさるてござるりうさいぞ地りいふおしりとまおびしく。雑絵ばは字にうりぞ。いちうく居より小ゐぞてばは出入まず、出ハ内居衣のそ色あして。地あやれお居也宝くとはぐるりのおりて。ば中ハ酒ものどとさとお出ぞ。出来じくりしまませしうとヽいへどげれ。出稽古や。さゆくのるすら字にうけそられしおくなば。出衣兵衛が再ものも日切よりまゆくお勤いつくよりそ屋よく。先んのよゐ西衣くいりと。かゞ様ありぞ出でてそ女房ぐるひもなつての行ゑ月ハまわり。傳せ跡のかれ術話のるよおりバやせくし。ぞ大たぶふいへど。尊まず太よ信ひ。書示の性明うさんろかぞ。雜おんハ男の系いおりく。ろぐまいゑの月ろ中あれぞ。夜中の月よろあがれど。お休のかつと。あ人侍テ大画のお分衣之へ。推まつてし。出衣兄にござりますぞ。洞衆の方ハ係とおさしれてござれ。ゐまするのせば。侍テそくゑなり所て。前年あ同まづかそ体めとあれど。あ人へさうれや。つかんへてぞおつきもうきく。ありゆうれに。よさかうぞ尾のこんゆゐさしまゐ猫老かしなうちをおされしぐぢうとひとうせへぞ。侍テ[illegible]

しぞくの遠土（ゑんど）すまゐをも願ふ身をばえてより二人のゆかりと
がそむへかくれぞしてまけつちぎりねが。これ行どもうきも合点と。金
銀づくめにゑんけ上衣（うはぎ）をきそへてくら。四上下（まうあげ）もしてくだされと。上衣（うはぎ）を
女人が見（まへ）にねぐさまつれど。女人ハまるでさいふしい男とらずの身が
算用（さんよう）づくめにそでひかゆるをそれ故でおかんらず物よあれバ女（ぢよ）女
京都にてなされバ。かの仕丁（しつま）どのハ当月廿日よ。赤松どのく
御家とあんらげひよあらハれまでくらずむ豊前（ぶぜん）名古屋（なごや）へ来る。
元日（こんじき）おのぞみ。朝倉（あさくら）は今までのひと人があれども。よそも（よそも）さるハ
られるやられど帰さいれらひ出（づ）さぬ。それよ今朝（えんてう）ハなる
かハ。その方たちの家来（いゑらい）を使（し）。女人住よかりてかろまへ来て
なるかバ。元服今まとすみんべし。まよ細（しさい）ハ揚屋（あげや）に今まで
と説（と）け給。太夫へ引かし今ゆおかれくしさふでも出かりでん
ゆくれねとあるゆへ。女人のめぐしふうされ出まれてうらさぬ
ざるをとつらそさむいよ勝（うし）ぶちめげ。まそどくらてまと
ね。面（ひる）のうちかしもしが付時じゆしやそで要事（ようじ）とさるさ。
けるやどるも出（むし）かくへぬ。おれども見るねかハけうぬと。
女へが上衣（うはぎ）をなげくへし。女人仕丁（しつま）よ道（まち）らの袖ねどりをさぎ
より。今までもしけれをが事れど。それハまつ待（まつ）てゆるし悪口（あくこう）
のゑとかどいひぶで。きちしてくぼつぶ。ゆこかりの思（おもひ）さる私のゆう
あだし有る。仕丁大事ハ山神よやうをさぞれ。古にハまめんの
ひくものちらげりくせでかろびをとき（き）そで。みくおくハあい
ちがやし。医（ゑ）とくいちでう来会ぶると。なふくばらずよ上衣（うはぎ）ととせ
まうけざとつひのかりて。ござる気も粋（すい）よ川（は）あくめ。くるま上（うへ）ひ
まるみのぞ花車（ちやくや）の遠道（ゑんどう）しけるハめぐごのあふ前（まへ）くづりぬすひで

ばれのかりうひしく手城(じやう)の手し、木(き)ずつひなでとかないでる魚へは家ま
ちぢがかくまつて、のぞりし世界かる間夫(まぶ)ぐるひく出(で)すかる。それがお
かくしまつりしハ、覚てぐでさるなじやと、世間(せけん)もれどそねだろう
れば、押手(おして)のつゞくぐけのつゞけのつゐ、めぐろくハ客(きやく)とぞそ
るまへぐるひまると、親くこともてもそも指(ゆび)ハされじ。これのあまご
貞そのまゝ、嶋原を雑(みよそ)津(づ)揚詰(あげづめ)にするとかくて
世界のつめと中てぞかくなれば、全盛(ぜんせい)し、嶋原(しりま)結ちる
ハ、桝ひとりぬすみもはらかくまふれ揚屋(あげ)の座敷(ざしき)よ月日
と悪(あく)ひりける

四之巻終

東京圖書館

西海(さいかい)太平記(たいへいき)　五之巻

目録

第一　船頭(せんどう)傾城(けいせい)も水(みづ)乃上(うへ)の商賣(しやうばい)
付リ　火(ひ)の合々(あひあひ)もうき世ハ愛宕山(あたごさん)の中宿(ちうやど)切
焼継(やけつぎ)火よこすぬ伊勢(いせ)若海のれんが波乃灰(はい)

第二　幽霊(ゆうれい)の南感(とくかく)て室執(りうしう)乃すがた
付リ　たまきされる八丁堀(てうぼり)の中(なか)乃まづれ
志(こゝろざし)ハ一つ魂(たましい)とまもれど男子七人のすうす

第三 縁ハ百れん開帳弟子の能毒付

付り 耳そろへて鼻もなき男ハ四国やが太郎
海へなげ込覚悟ハあらに沖の友つき合

第四 念力ハ鬼をも欺く浅草橋の敵討

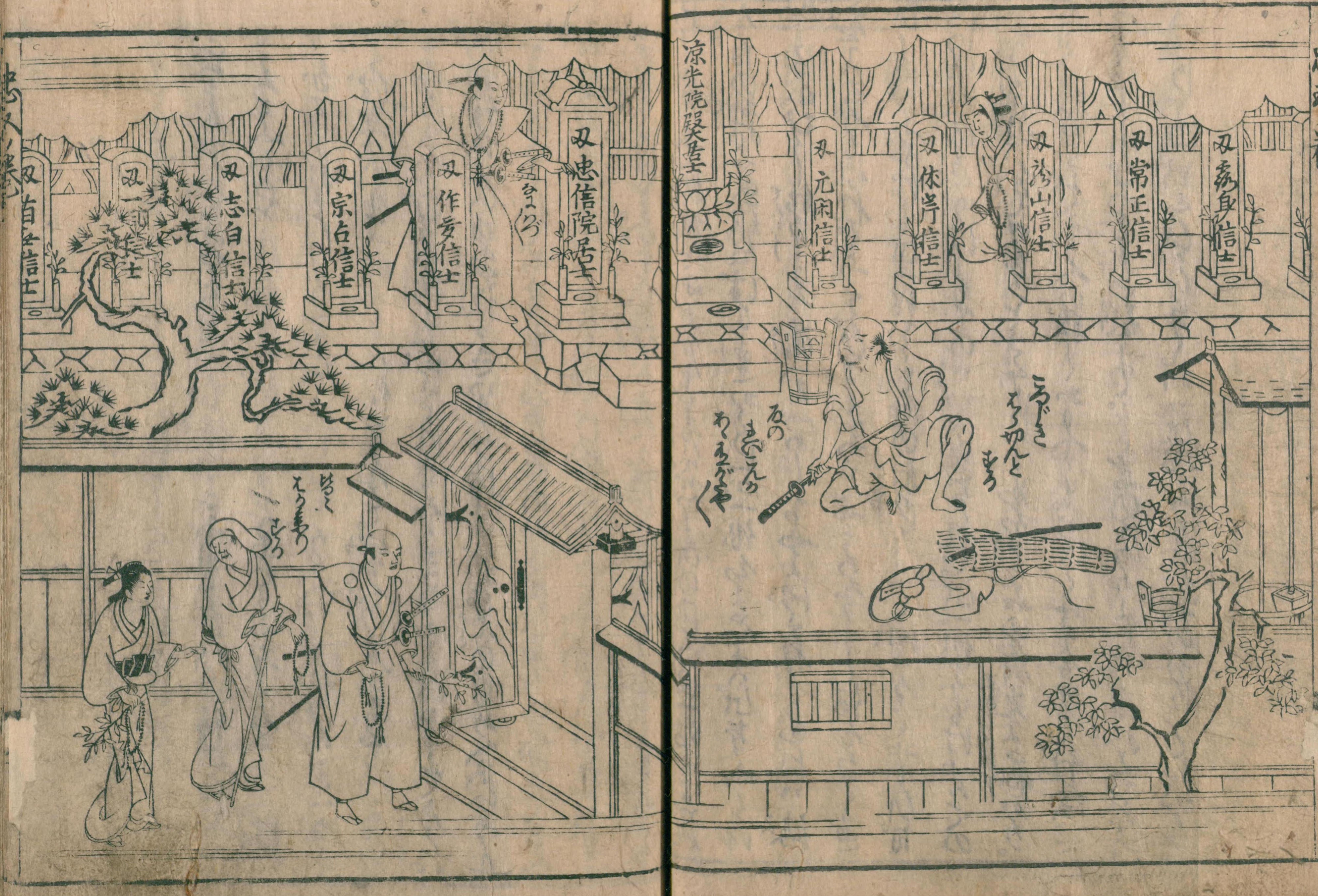
付り 古道具の定役ハ棒でも拾ぬ金筋
荒筆とかけし藤屋乃天職

㊀ 船頭も傾城も水の上なる商売

浮ハ人の敬よりて歳とますくはうるも宜なりぞろし利益あるたなる紙神ニ中なるちがひのあるといふ人もあり。たとへバ浅草山へ魚肉を食して参詣をはゞからずへかしの類のいよりて大ち野を喰ふ。登山せんとされバ僧よ眼にて御中にて絶入をうるまで。おのそのれねはるかるにハ巾ちやくきり御免を蒙りてまるこもしてまずあるす商売をつかまつるもの不運。好物服思令をされバこまの原よ至三日よ寺しき理の理といふ手のもの。中出物ごまの原客れ盗賊へ。此外の居所よあく福ばし人かより元とはるさ〇バ縁よハ自滅よ及ぶかくやされぞ十四年は

残。塩冶判官高貞切腹ありて。出せし後落城の時。家中ちり〴〵
其の妻女。松江の浦より舟にてのがれしきざみ。船頭ども。
かゝる所。悪心を起し。つまさをひろ下人六人をたぶらかし
まちうへあげ置。六人姉妹おまつハ海上へなげ出。侍女ゐ船頭の妻
女を害し。荷物ぬすみたるさみ名の中にかくし。手に入金子をと。
五万あまつて配分し。それより船頭を止ておきたりしひよりもつゞれん
ある又市ハ市兵衛。九ゝ兆ハ仁兵衛と名乗。両人同心して
久しくへゟり。市兵衛ハ大坂湊橋へ出店して材木問屋と
かり仁兵衛ハ当地に住てのち。地持地を求し。大坂と
手廻しよくおもせましかひかく商をいたし。友人九に取られ
ころの者なれハ大臣しのあに苦労を付て家も破損せしる
りかくに身代の仕合よく仁兵衛ハおびたゞしき分限者とよばれ。

けるが家をつぎ隠居をみさかんと。老谷がしひの口大画一代とよばれ
今日の若者まで難儀に逢ひしが。一兆ゟよきハ此たゝふくは
とるふむひし船中にて海へたづめし女を沈めれども。かれハ海
底よりきづくわれたりてひよまがつてんゆきしともんをすくい通
ひしにや。よほども此一兆とも何の船頭よく沈めるとおもひ月
此の仕掛の通りはじめての事はまほられど。此一兆もはじめての
つ度よ肩をせざとさゝし。むかしどこの肩先よ疵あり。
大くはかくそぞく人の糸しおりも。そくは合せて付さき
わぐがよくふむかまき話してそ世の内よい内方おとなしく
ふがうしよ。一兆をひがけはくおつは女房へのかわりしたくぬか
に男語の荷物と仕かけぐれぐ女房よ如何でがお内上のより
一つもおさず白状てすゞみとらみすぞ。すみくはいそしとよろこび。


凉光院殿□居士
及元閑信士
及休岸信士
及□山信士
及常正信士
及□身信士
ろぢき ちろ切んと まう
石の まへえん わくるがや〳〵
及忠信院居士
なまいだ〳〵
及作□信士
及宗白信士
及志自信士
及一□□士
及首座信士
はて えう事 さう

りが首よりはさみて男結と手ばやくきりあて。綴くゝりへつよく身を結れ若衆はうちかけひくうちにかきけばかたまりまじく已に傍子にはる事と申すり。有頂天までとゞのぼりし。くさり閻浮生の縄鎖があがくのつよきゆへ。鶴岬や太夫が前生ばんよる不同かられ男結の縁合とよろこぶ。女めと同穀して死たまつりぬ。さあへごふかさまふは。鉄砲がふらがれとひとりごとをいふて。ひざのうへつて居たりしろへ行そば立して。傍子さん何はなんと。浪人の身がちが何よなかりますくいへども精よ矢ちいはど。志まあすふればとこそ。今ねの此縄鎖よハ中由緒がきいまりほふけるが。先の男めくへずらぶんおまりなされて。さてゝるう鶴岬やの秘くよになりまへばてさんらかがゆるでのうらがやすくばゆその。まふく天罰に。引けるに虚空の法と会で面縛して死り鴨と妻一所に合て首くゝら

ふり黒づけをそべて絆を切すてし蔵をまねば絆をきるまじべがゆゑば志づまがひざをあてゝくるりとしり前にこれ留さりとては実まけの身はいましが男の上をあつかぬ人すら勢をかけ不若にてハがらのぎりぐゞわり臣の爪をしこみ白きつそくれなりて今夜男結あつかれてゆく鶴岬やハ何此もいつ毎りいかほしても合点のゆかぬものあつまる右の肩さきよ疵あれどかれの結出されてむつれ梓を実食。類はきゝまくが相南にげんなき。ころ置きはいくらふてもや西りたがもそへてくぐるくしくへが秘ゐるひざ中やるハどうども傷をさすりてくらへでもはりよくものとてぞのいひけが有ていぞれをあてよ鶴岬やへ今け置ききりくその男が数でないとぐさかちぢひまくさていふてくるとへもどろぐりぐまいすまハ文数よきうちり止内。一旦女房よぬて

ガラス使用

夫を殺し敵討といふひとつそれがさらなきされば男太夫がちからぞかし附

ハ密夫の法度にて敵手のるいまでへぬべし覚でもすむまじ

掛乞男と理屈をいひかけてむかふ事をしれど難波はそれとめてかつ

き母公の一もんちに敵うちくるしいでかふ事きびしくつとてその筆ま

へまをせらんぞ若こゝろにそれ手付までされてぞ親へかゝり母にょれ

徳兵衛どても縁につきぬるハ男がいつまでこゝろ夜のまにうけて。

殺してとされ若浪女とずまうつもて揚くまぞ若き夜も流をと

こゝろぼにたゝふ女ふゝへうぶそでずま人の縁道ふけしまうぞなさ

にうくまかれて山揚屋に常を幸めりそなかうく七年ぞなさ

も疎よ年のあつき男をと向まをさゝうむゆへ恥のつとめぞるもと

殺すまでうき身にあつそもよふのつね敵下従ワざもせそ居

る伽屋よおもひぞ今宵くるをとわけ出ぞ二人さしちうへ世まえ白中

とらへられ来までゆるしてそのかくへいふ難波は身を合せて。

助てたけるハ命とかれ今一下に花まつよるとぴそくく

男ぞしらへ向露のすそこふさう人をぞ悲傷の風をたよりと。

死ま度ま日とくらしぬ

㊁ 出来の当惑ハ宗枕丸雲助

ある所ハ市人の膝をとるがりて船しめをうけ合とりとめるよ

ては律家ふまあらそひしげなくぬわけ所をとるとがん家の生字そうれ。

人このり東叡乃ふ歌と思ふよ。お別関を出しらすでり

十年にあまれバ男宗の路銀もいつしかつきて分ふへ

よ伏辻堂の軒にまよひて旅人のあちねをおんといだ。

宿さだめなきを中ともなはれて宿ともあらめくまにパ丁

征の伴ふへもつてハ腕行もうれをまずせど雫の兄合と

なりて苦しみをうけて。その一條をこのふつゝ後悔の
一盞二盞とたはむるゝ。非人の手業とおなじかたはらにてまこと
といふ善はめでたの。火の悪はめでたの者をとまりしやまず。
金剛力もなくて身をよ。叶はず悪もまたかんよ。是はまづ一派乃
御会力大の流もおもくならされバ。只のおとめしせさすざいの
大酒しぐりきへひうきへりせて一里ぐらいも退わぬき。横く
一丈の蔵よそぱ酒の精とりしか一日の飢をゆるされた非人
のことばの時くまそちがうもわらじ。しかし酒の精を南蛮といひ
しり酒をきみすくそなうようら酒のうまさも酒精と申を
米をとちり。麹をげんぜい。株上のかまひと酒上のげ
んぜいとみな浪人同士の輪なれバひとへに主類のぐゝし。亡君のれ
思ひとゞまらへかへり。面目とかなしめれバ。四十七人の討死は
さてよきも人絶めまらどの御墓へまいりて。此くらのうち向ひてを
さんと。塩冶判官殿御墓所泉湧寺の門へまいりけるにりやく
かくりぐしきありさまにて主人の御墓へむかひて各々のなみだ
ひさしくありしかんとのぞさとらし。彼冒雪をかたらひて墓所へ
来れどもほさんへ親のちくつまとゞめて。石塔のかしらへかさ涙
此くれねがりやう人乃亡魂これとこぢびきおかうしく人々の
涕し石塔へさらりて。早すりして。石碑の芳名ときれへぐる
各依お君ておの志れうり。さてふすも亡魂たち
向ふやうに一志に乃まさりぬためにのうち向にてあびる
ともとや。御身をぐらうして。おかはど声をたすけの中
とも合きようけのうち。をやとる身をきげくらし塚乃かまよ
ずんざもとかりへ衣ども亡魂れまひかくまで思ひ生死

の程をもとしめくるしびすべきなくては我等がひとつもかなひ申まじ。
ありやなしまでゝ叩て見しごとふつくえし一揆とずつくぬひ
てすぐさに自害しくえてくゝ附くさや石塔のはしろをら白
わ神よ大かよこゝろへそろ。男の幽霊部屋出つ乞食乃をに
とうつさやあ非人自害とともに其がおるめかハ死ハせ
ねとこうともしろ。六方縁類をたずし。我ハ中しハの中亡魂
我自害をとめすつゝ。わが幽霊頓証菩提とむれらふ
回向も頼む亡魂へ申上ます。敵の名ハ何と申て其所々
いづくに居しぞ。聞もらせくざされよとしめてやせバ。件の幽霊
かし当惑とかくてしばしが返答ゝなかりしが。やゝありて敵乃
名ハ何とやし思案ゞかの時。石塔のはしろより声ありて。
とそ難波ばとあれども。幽霊ゝちとうらみづさいりおもく。お敵ぞ
難波ばとおもくしてあり出けれバ。六右衛門ふしぎゝかくおら敵
の名をききておどろきハ。我か身にとをめさん。さりとも幽霊ゝつくすきま
じ。さらバ難波ハへ出むりんおいてぬ申てはいかゞし。是ぞとてや死
てゝまちに悪して幽霊とゝつゝと立おかゞ所も参しさ
わるかへバ宿へ出や。ねく押よハさつつあり。されバさらへさ
せぬゆと夜かつて難波を苦に今ゆ死ゆる身も名ひ出せバ。お
ふもバハさやどをとつまじく。今乞食も行ごあて娘ゝき
ゝかりひおうて精霊と挑もべし。よゝたいおくはとゝつさ
のでらほぐの大坂へくぐら精舎てあるとさたん普段の中や
去るがし。我とと見へゝげんとゆへとゝつゝむかうしおと入れ他のうち
もしおれなど。片附も夢よ死すなふ。とハよしろへ参まづつぐ。さらバ
最期ととしかずよし。携刀とめてそのうち。高みて何とぶ我もしとゝふ

とらさ。又門おゆるし人都ともハきのごとく自由自在にさせまするゆゑかと。二人ハ有様のひしろ見へられ。相よろこひ互にへ。さいぜんの乞食と追れまへし。おのを主ハ助じと墓所行て来りし営の家れるるれども何のつもみんでざりが。あ云人のくられ枝梁マタ人へてありまゆくが。主ハ若仲屋の一紙たり。ぱ待おもと岳の領搦をうぐるてうけ取すてもよが写て都ハみんて待ども。はなをへつけとふざとハ。那波ばが身まよに拵へし。一ゑ二ゑ三ゑに切てうば。もう波なふそは見とこるよう。刀をぬきつまむ飛でお。切分れど。一廻とくとたされふと。ぱあつの同類一さんよ勝の子をとられてく。纔をも見んぞして君けれねぱ。ざあきやうがとどめをさゝんと。慚愧なさわそくは立うくれバ。おくまるまのとれよ。一ゑにとつるすおり。我ハかりし出雲の西松江の浦乃船たるがゆゑしもあらするゆゑ今ハ源氏の身となしが天罰のがれがたく。今坦落村岩屋の墓乃前にあつて死するまでむくひのおそろしさ。持たる刀とのどぶつさし。鐵梅とてぞ落たるだりけれバ。さうちう成ちう喜び。我ハ彼たりしぞと。首とおんとかし面へさいぜんの乞合へ急ぎうけ。くらふ手向のゆみおぐもし只今ままやうさんげと曲ながそれがうる主人の歎首と我よ語りくれちち喜びとまれど兄弟ぷやあ兄さのららとかと兄弟ふしぎの對面し。嬉タも云たるを見よ。持そそゆゑへ京都よて旅立の用意と。請あしつらうてるる。さら夜ともる去るへぞむらうもうぎの所縁と悦び。相今二人かしこもい又姫君の御りまへ。さいぜんそるさ云の名残ありし旅ようつきず。奇ハふのこととなれぬへし。光明主人の冥魂我しに御しせめよう。ふうかん二かへもさよく那波へてすめたる。二人ハ落涙のさらいくつあててはし。はつせんとお

かゝる事ぞさしくの町人となりて借屋かりにてさらんかうと思ひこれ
くれぐれも存じつゝいづみや山谷（さんや）の寺にはあらざれども
兄妹（けい）あまりまでいかなる男太八ハなか殿（との）の娘を所に戸弁当（とべん）ながら罷（かい）
商売の町人と成て居る。蝶丸屋（てふまる）の桂なりたり。細工年（おぢ）をかさねて
出状まする。其婦より生活（せんろう）してゆく入居といふもの七十六歳を
かぎりこの世をはかなくなる事と逢（あい）しとこそむかしゆくぞかしくにて
後家あへかな涙となりぬる。それゆへ今は因縁（えんだん）はへ集る
申せし本よりの親元（ふぼ）にかけ落（おち）としたりぬ。其方ちの主人の
墓所（むしよ）ならばあれども存じて（さしゆ）立より来れぬるは不便と挨拶（あいさつ）して
しかる事（さうそく）あり。左近にうけるが御目にかゝるまでさらに今もぞ我（おが）
利益（りやく）もへと仕（しまへ）まつる事ぞかし。殊（しび）の外自身（ようゐ）をなかしてぞかしその寺
へのかかりしとぞ

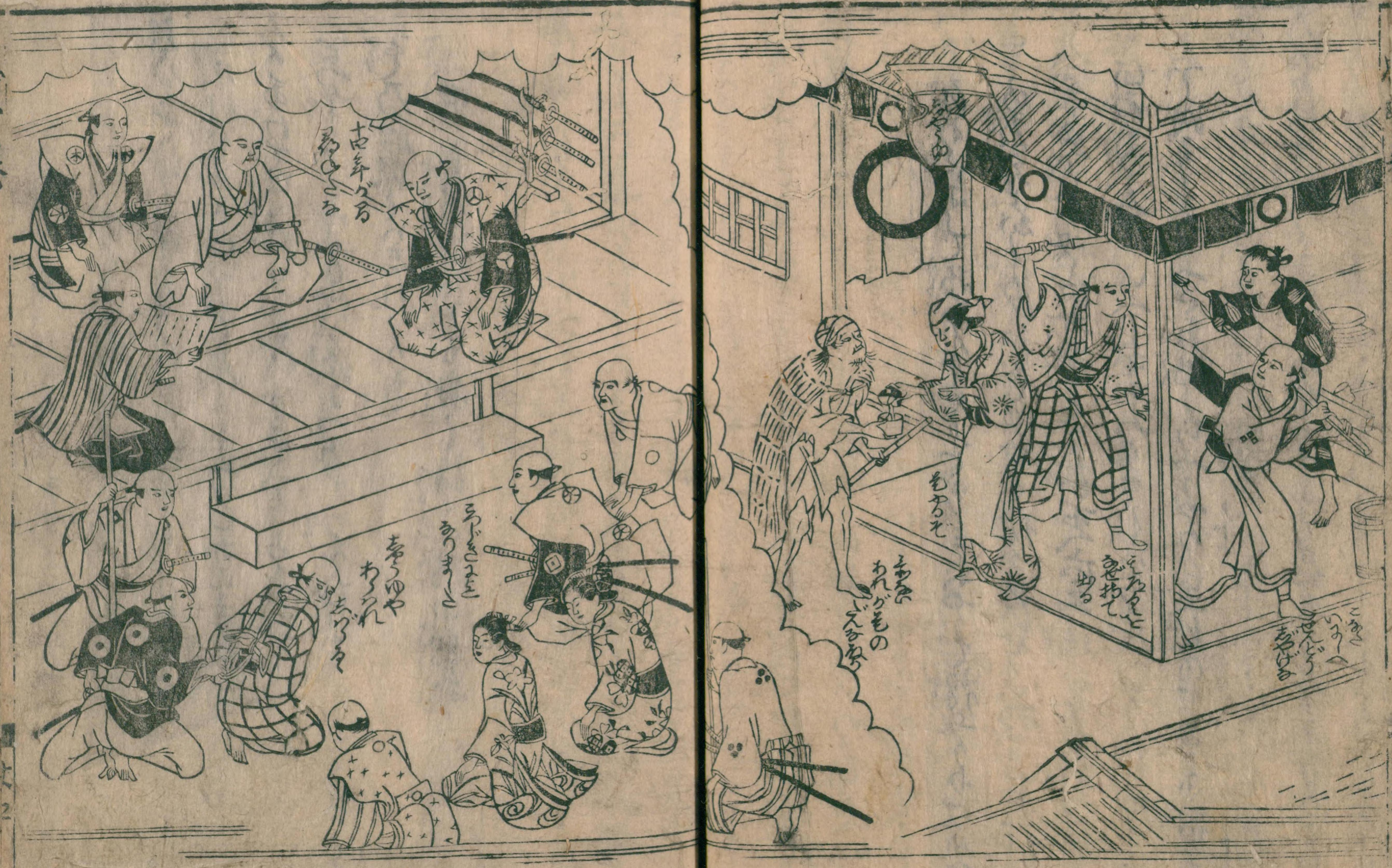
㊂　役八百屋の開帳薬師の縁毒付

座に住ける京屋五兵衛町より都に一軒の手代の家のすみかれ（る）
よみせや酒屋はいづくやいづれもその織（しよく）の縁（よせ）をきまするかなれバなり。
縮緬（ちりめん）の名もめづらしからぬ実づくし大坂乃芝居に出ん年桶川（ひや）と
いひける者とせしかば桶川といふ名なりしと。芝居
とまをして桶川といふ女形を出せしが。二度芝居の名
かるみに中ててあるがこれこそよけれと。近年
いかにも名を付ざりき。東（あづま）のある風にむかしより都より芝居
いつまでもちまめかしく芸居（まづ）を続けえハ天識（しき）より都に付
まづきに名をかうとしてこれに出方（どんだう）のある清十の往られし
町ほどきさや出ろる程のうちにも申八芸へ出し方めくば
かつかくろ見の在所（ろうめ）りくの町ちかつかたに全盛（ぜんせい）なる女形

まのあたりつれてきたりけるの大悪無道とやいはん。女十七人の一味の
内。風呂屋内の一子。風呂屋吉兵衛とて生年十八才の律義者
なるのより次をいそぎ其の荻山へ走行。千生八百石くだし命
をかたりきたりなるによりてしかるべき体にはさびしく風呂屋内乃
十三年まへを思ひやりて主人へお頼みかいふしくへうろつき
とあふ歳までの身の新町へたちこみ人々の中にも一物語。此
さまだいやうとてあるべしけれ共名を申べきなれども聞はとぞ。
まり新まへの知る者にも近頃のあやうきをそらきびしく。さ
まへはかりも可頼と申べし。随分構の大事内屋の市兵衛
衆人のゆびさゝれのがたなるをよく知れども其身富
にあらどさ海のうれへより由よ此居の媒親たのみいたし
かうべきまれあり挟しかんせ池の小岩入居。耳をかして囁きしむ

かゝる男と申出てハ八右衛門の事とせんとて申はなれぬ右衛門を
づけ申且の生まつらはせのけかれかちよ人も相談まちまちかあれバ。
おもふばかりの様にもいかにもいかにせんとをゆきて仕くて黒如乃屏
風をそむきてたる。本業ハ赤堀天皇の安永いつ弓部の道鏡
一刀三礼の秘事の秘事おもて立せてれまいとさつまれる玄宗の帝
本尊の肝腕乃悟道され。こなたる八女相の薬師瑠璃光ハ包紙よ
くりしてお向きまうた玉宝へまいれバ茶屋入其の世をと依然
上人の此新しくて三途川の姥に向をさせて小町百年の
姿しいつはりかへ有髪の地蔵も姥の婦人の千手の俊
生作閑のある人家内かたに天人乃未来頼むの手向の尾
をしけてござれ笠子のこまかり年屋風呂ぬれ女房
浮世の気によまでかけりそであり弘法大師の筆勢。釈迦も如来ってと

随ひせらるゝ角大師の御札ひとつも請まいらせぬ是高師直が申候
うせそしてぞ八百日の祈祷とまゐらせけれどもさん候いたしかして地中屋の
偽綸言書の雁代合戦てたまはれのとあげられてぞへあまる
も後れず。ふ先なるまじき也。やまさり為にさまざまにすて小衣
の御文書院の御書をあたへ又万民の郡義ざるふようとて幕下
万民ふ法は今一旦天下をもて世介味ありとしたもとめざらにしと思ふべし。
遠をも疑しあへで指南役間屋の市を帰きたまる八ヶ所を賞するる
まかせあれつゝそ海よりも割しとて報の為に海へおとづれさせりさ
ねてはそ孫うりしと一人空一人をもしもせるへりうかまさ
たあれだ町内の年よりらひろさるハ明まとしてたまりた思らに
いそゝ勢八海日れからゆふゆふすべしと起せなる宮寺の室海へ入
し幸ヶ賞を出さぬより罪かくしてかすすべきと仰付せり
どぶんをとぞそのむくろ為ぞふけるか千嵐ひそか小ゆをてとりよ
代官等へさゝえるふと家さに迄せ又当まもよろしく他所の窟をとりて。
称績室ときたでもせんとのごとく全経をもよりのあかしがあつかうひさる小家
あかりの鳥代ひ績室とへそふて法もゆへよりて風呂吏め
つまりおかゆ手でおあしよせしとも市之系中ふそ様ふりあげふの
きそのたべをおしおかゝへしてゆけと我がうひ考でもとも性根
よ入ざるゆへとざんだいに手掛てとべきそ西へ出る孫かまへそれま
でとわやまやとていへでおまかせ又小れもびろうし新町よ佐
とか附たるかつかさ佐伝とらあふうぶむの支配のせめかかふ稼がお
ふとし世せしのその指南橋の指南役間屋と定めしかくれが高貴
の指南屋称つぎされきにゆへよりしゆと聞そこんにあたりぞこれ
なるがおお指南屋じ為をしてうかびひかるべしとぞおそらとそおよひ


こなた いろへ せんどう まぢける
それ見よと 急ぎ持て 出る
ちやるぞ
こじき われらも ものぞなる
こじきこそよき ありさま
ちやうゆや わらわれ まづかる
古年が方 見にこる

孫さりし時にハ二代と社稷(てうちやく)やまずして代今ハたえずとかや。いやしき者なれどもあまりのせつなさにいろ／＼かなしさもいかなる私(わたくし)ん道(どう)乃あそびに分限(ぶんげん)にあまれるもあるまじきを又て声高(こはだか)にのゝしれども常に乱(らう)をましへて是が為の上ませて気(け)を得(とく)てあふりあげて返(へんまい)もとの代にかへりて出て取りし所でかなさ六十六ケ国ときを定め代が絶(たえ)ずつゞきてたのしむところを申てみたりけるに。愚(ぐ)も乃船にハ乗たりき

㊃ 腕力(わんりき)ハ鬼(おに)をも挫(おぶ)く渡辺(わたるべき)橋の敵手(かたきうち)

一念天に通(つう)ずれども鬼神(きじん)の腕(うで)みても蔑にすべき渡の橋の将監(しやうげん)座ハ並ぐ鉢ハ六十六ハ気合(らうしや)にも及ぶて籠の門(うしろ)に立て食(くは)るとなれば下(え)兵も安(やす)ら討(うつ)ても手(て)にあまり抄を入てくれる事ハ中々文字(ぶんき)いつけのあんハ御ちぢかゞみハ又是に強ぞ凌(しの)まに橋(はし)の上(うへ)に敷(でんりん)て大いげて所ぐりかへりし所へ主人名代が渡したりその者を守るのせけれバ御侍(ちくどう)も主人の名を渡したりかるかと思へバ犬の代を主人の名を蔑(ちくどう)乃それ在(よりのみ)たるを帰(かへ)しと蔑(ないがしろ)にせられけれバ今ハむかしの御ためしと云さる月(つるひ)殿しも切へ入らんとせし内探(つりく)せまろ者げしと申しあげ国付ハ天下(てんか)大将軍(ぐんへい)所代るれバこそ又殿の御手もいろ／＼かゝる敵手の中をもと此代官所へ上まし其のちもちとをとぞくへしといへば是ハ何とも心しも此代官所へかけしきるろくに替(づん)別にも私信(つかうし)師(きゆう)切結(きりむすび)大坂を敵の切結もべからず所(うろく)をと定めたり其れゆへ別て静(しひ)経(さうへ)に渡りの伝(でん)執(と)者(うけ)むけてある拝ぐろうざりしに六十ケ見舞換(ゑんでん)所へ来りの敵手の従弟(いとこ)て早とまれバ刻(きざ)結む宝もかし敵手とあれども兄(え)途(と)織(がく)ふまづハ一旦(たん)此方よりかゝりてそのゝちはじめてへうくまずへしとてそれ小人(こびと)六の悟り教(がう)を百人に仰付られバ何ものうきをすぐ赤松(あかまつ)といはじ

あまりの事におもひしとゆへ。糺明をうけても陳じがたく。そのまゝ八十
四年以前に播州の郡にて再度と謁見せしといふより評判伝わ
へ白くあやまりて後刹那とおもむかんとせしおりふし。白昼に及ばず云
たゞちに主人を害し其妻女を殺害し。家財を奪ひとるへ
其のまゝたるべしとて。子細にはせよとの事へば。今は陳ずるに言葉なく。
ぬかれじとて前後の事たるとおもひ。ほ身をてつから捜る附
四方計なる息女のありしはたゞちに盃べしと契約いたしゆくナカ
まゝ主人にうけ盃ぞれける。西の御女所にかくまひおきつゝ
めされにつるゝ。只今はねのかたもとおもひけるに。その砌へ
上使にむかひとせしは。すなはち縄かけて六左衛門へとらへされ。役
所の者ハいづくあやとのかれ。かくもどり女房をとりくしあらう杯
不し仰せられ。上々さまが大勢とかんじられ。役[illegible]

御とゞけられ。此事の次第をしたゝめて仕合として御禮を申。被成
家中侍に於ても六左衛門をはじめとして評判六左衛門合をと捜て申されハ則
其此機嫌よし。此播左衛門は[illegible]いたゞきて御身すへて西國の
御前に滞留して白状をきゝつゝ[illegible]ゆくゆくは日本無双の名
にくられて[illegible]これ大播左衛門先祖旧功の者なれば。猶まへ
子細と申へば六左衛門は妹女房と武士の名をもつて捜ゆく
能きゝたるにやまひよりあやまりとゆるし。此度は天下の御運
日夜へ出して仰せられ。先知を下され今まで悦のまゝを
ひさ。ゆるゝと申主人の息女なのかへとお切りて何
方へぞ縁者となりて。此一子若衆女房をめかれ
たゞし新く侍にまはれて猶また七人一列のうちへれば。是非
息女をとりよへしきりて此者を門へ申しをうけ。六郎左衛[illegible]

京
191

ふたゝび一とおさまりしされば悪逆をとげ[illegible]御母[illegible]

京にお[illegible]居をよせ同年[illegible]の御ところへ入たまひ[illegible]

川[illegible]は天の川南斎[illegible]より[illegible]の[illegible]

まねびの歌[illegible]の詩人の歌才の様び勝れは[illegible]

このふれも[illegible]まねび[illegible]まねび。こめでたしこめでたしと。

さればぞ奇妙とよろこび人数をそろへて夜をこめてつどひ[illegible]四十七人

[illegible]ともしすゑまでも[illegible]代々家業のさかえたり

けるとし

五之巻終

正徳三年巳九月吉日

新版

ガラス使用